



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

金 沅 基 教授指導
碩士學位 請求論文

打消推量の助動詞
「まじ」の通時的考察

2021

誠信女子大學校 大學院
日語日文學科
金 智 賢

打消推量の助動詞
「まじ」の通時的考察

金 沅 基 教授指導

이 論文을 碩士學位論文으로 提出함

2020年 11月

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

金 智 賢

認 准 書

金智賢의 碩士學位 論文으로 認准함

2020年 11月

審 查 委 員 박 일 호 ①

審 查 委 員 김 옥 임 ①

審 查 委 員 김 원 기 ①

誠信女子大學校 大學院

論文概要

打消推量の助動詞「まじ」는 上代문헌에 「まじ」로 처음 출현하여, 中古에 「まじ」로 이어지고 中世에는 「まじ」「まじい」「まい」로 분화한다. 이후 近世에는 「まじい」의 세력이 약해지고, 「まじ」는 주로 문어에 사용되며 現代에 無變化助動詞 「まい」로 정착하기에 이른다.

「まじ」의 변천과정은 많은 학자들에 의해 연구가 진행되어 왔다. 그러나 이러한 연구는 주로 시대별 또는 활용, 접속, 의미별로 국한되어있는 경우가 많아 전체적인 변화의 모습을 파악하기에는 부족한 것으로 사료되었다. 또한 고전문법 교육에 있어 부득분마다 「まじ」의 활용형과 의미를 제시하는 모습 또한 통일되어 있지 않은 실정이다.

이에 본고에서는 이와 같이 긴 생명력을 이어온 「まじ」가 어떠한 상황속에서 변화하였으며, 그 변화에 의해 현대의 「まい」로 이어지게 되었는지에 관하여 上代, 中古, 中世, 近世의 네 시대로 구분하고, 각각의 시대별 활용, 접속, 의미에 대하여 실례를 통하여 고찰함으로써 「まじ」의 변화양상을 관찰하였다. 이를 통하여 「まじ」의 전 시대적인 흐름을 파악하고, 나아가 고전문법 교육에서의 「まじ」를 어떻게 설명할 것인가에 대하여 제안하였다.

먼저 상대는 「まじ」만이 단독으로 사용된 시대였으며, 음절이 축약되며 중고의 「まじ」로 변화하게 된다.

활용면에서 상대는 連用形, 終止形の 두 활용형만이 나타나며, 中古는 「まじ」가 가장 안정적으로 사용된 시대로, 모든 활용형을 갖추고 있다. 이후 中世에는 ‘終止·連体形の合一’에 의하여 본래의 어형을 유지하기 어려워져, 「まじ」「まじい」「まい」라는 세 형태로 분화되고, 終止形과 連体形에 집중되는 양상을 보인다. 近世에는 구어에 「まい」가 주로 사용되고 「まじ」는

문어에 주로 나타나며 「まじい」는 거의 사용되지 않는다. 또한 終止形과 連体形 이외의 활용형은 나타나지 않아 쇠퇴하는 국면에 접어든 것을 확인할 수 있다.

접속면에서 上代の 「まじ」는 動詞의 終止形 및 う行変格動詞의 連体形에 접속한다. 中古의 「まじ」는 動詞의 終止形 및 う行変格動詞와 形容詞·形容動詞의 連体形에 접속한다. 中世에는 접속면에서도 ‘終止·連体形の合一’의 영향을 받아, 上二段動詞, 下二段動詞의 未然形에도 접속하는 모습이 나타난다. 近世에는 접속면의 혼란이 심화되어 上二段動詞, 下二段動詞 이외에도 未然形에 접속하는 예가 발생한다.

의미면에서 上代の 「まじ」는 부정의 추량의 의미만을 지니고 있었으나, 中古의 「まじ」는 부정의 추량, 부정적인 의지, 당연함의 부정(금지), 불가능, 부적당의 다섯 가지 의미로 확장된다. 그러나 中世에는 부정의 추량, 부정적인 의지, 당연함의 부정(금지)의 세 가지 의미로 축소된다. 近世에는 다양한 助動詞의 발달로 부정의 추량, 부정적인 의지, 금지 세 가지 뜻만이 사용되게 된다.

다음으로 고전문법 교육 측면에서, 「まじ」는 未然形 <まじく><まじから>, 連用形 <まじく><まじかり>, 終止形 <まじ>, 連体形 <まじき><まじかる>, 已然形 <まじけれ>의 다섯 가지 활용형을 지니며, 활용어의 終止形 및 う変型 活用語의 連体形에 접속하고, 또한 의미는 부정의 추량, 부정적인 의지, 당연함의 부정(금지), 불가능, 부적당을 나타낸다고 설명하는 것이 온당할 것 이라는 결론을 얻었다.

目 次

論文概要

I. はじめに	1
1. 研究の目的	1
2. 先行研究の考察	3
3. 用例のための資料	5
II. 本論	7
1. 語源の研究	7
1.1 「ましじ」の発生	7
1.2 「ましじ」から「まじ」への推移	10
2. 活用の研究	12
2.1 上代：「ましじ」	12
2.2 中古：「まじ」	14
2.2.1 助動詞「ず」と「べし」における未然形の認定	18
2.3 中世：「まじ」「まじい」「まい」	22
2.4 近世：「まじ」「まい」「まじい」	28
2.5 副読本の考察	32
3. 接続の研究	38
3.1 上代	38
3.2 中古	39
3.3 中世	45
3.4 近世	52

3.5 副読本の考察	57
4. 意味の研究	60
4.1 上代	60
4.2 中古	62
4.3 中世	64
4.4 近世	66
4.5 副読本の考察	69
Ⅲ. おわりに	73
参考文献	
ABSTRACT	

I. はじめに

1. 研究の目的

本論文は、打消推量の助動詞「まじ」が上代文献において「ましじ」として現れ、中古の「まじ」、中世の「まじ」「まじい」「まい」として分化し、また近世の「まじ」と「まじい」の衰退期を経て、現代の「まい」に至るまでの変遷過程を通時的観点から考察することを目的とする。

「まじ」は、上記のごとく形態面での変化を経て現代の「まい」となるのであるが、この形態が変わる過程には、各時代別に活用・接続面が多様な影響を与えながら変化を進展して来る。まず、上代に三音節の助動詞として現れた「ましじ」は、活用と接続に制限があったのであるが、中古に入ると二音節の助動詞「まじ」となり、使用の側面において一番盛んになる時代を迎えるようになる。この時期の「まじ」は、ほぼ全ての活用形を完備し、接続面においては動詞・助動詞活用語の終止形（但し、ラ変型活用語には連体形に付く）に接続することを基本とする、安定している様子で文献に現れる。

中世に入り「まじ」には、「まじい」と「まい」という新しい語形が使われるようになるが、これは「終止・連体形の合一」という時代の流れの中で、活用と接続に大きな変化が発生するようになる。この時期に入ると「まじ」「まじい」「まい」という三つの形態に分化し、活用においてはお互いの領域を犯す様子となる。それに加えて既存の連体形が終止形を重ねる「終止・連体形の合一」により、接続面においても一部動詞の未然形に接続するなど、前代までにはなかった新しい接続法を用いるようになる。

以降、近世には、漸次衰退していき、今まで基本型の位置を占めていた「まじ」は「文語」であるという認識の下に、主に文語として用いられるだけで¹⁾、中世に新語形

として発生した「まい」が勢力を拡張していくようになる。この勢力の交代と共に、活用は終止形と連体形にのみ用いられ、接続面においては四段動詞の終止形、上二段動詞・下二段動詞の未然形、ラ変型活用語の連体形に付く、安定的で制限的な様子となる。但し、カ変活用動詞とサ変活用動詞とは地方により接続の差があり、現代の「まい」にまでその影響を及ぼしている。

上記のごとく、長年に渡る「まじ」の変化が、どのような状況の下で発生したかについて、様々な説がなされているが、その研究方法においては、限定的な時代を対象とするか、もしくは、活用・接続・意味の別々の断面で論じられてきたようである。そこで、本論文では、「まじ」と代表される、いわば「まじ」系の助動詞の変化を総合的に把握することを目的とするとともに、さらに、古典文法の教育における「まじ」の、教育へのより正確な理解に役立てるべく、先行研究の業績を踏まえて語源、活用、接続、意味を時代別に分けて「まじ」の変化の全般を検討していくことにする。

1) 土井忠生(1933)「近古の国語」『国語科学講座5』明治書院 p.96

2. 先行研究の考察

「まじ」の変遷過程をめぐっては学者によって多様な論が説かれているが、その中で主に問題となるのは「ましじ」の発生、未然形<まじく>の認定、「まい」の成立についてである。

[1] 「ましじ」の発生

「まじ」と代表して呼ばれているが、その発生は「ましじ」とであると一般的に認められている。この「ましじ」の発生に関しては二つの説がある。一つ目は推量の助動詞「まし」と打消推量の助動詞「じ」が結合してできたとみる説であり、二つ目は推量の助動詞「べし」の語源の「うべ」の古形「うま」に形容詞接尾語「し」が付き、原始的な否定辞「じ」が結合してできたとみる説である。まず、橋本(1955)・浜田(1955)・後藤(1969)は「ましじ」と「まじ」は語形の上から差がなく、助動詞「まし」と意味の面で反対であることを挙げ「まし」＋「じ」説を支持している。一方、橋本(1951)・山田(1954)は「まし」と「ましじ」の接続法の差と音声的な観点に止まっているところを批判し、「うまし」＋「じ」説に賛成している。

[2] 未然形<まじく>の認定

「まじ」の未然形<まじく>の認定についても未だ論駁が行われている。未然形<まじく>は文献資料において用例が少なく、かつて橋本(1951)による「ずは」の解釈の影響で、形容詞型活用をする助動詞における未然形は認めない立場が多いようであり、多数の副読本において橋本説に従うよう、<まじく>を完全に認めていない。しかし、松村(1959)は、助詞「は」を係助詞と見て<まじく>を連用形という説に反対し、仮定条件を表す「は」が下接した<まじく>を未然形として認めている。この未然形<まじく>の認定は、古典文法教育に用いられている副読本においても統一されておらず、問題

は大きいと感じるのである。

[3] 「まい」の成立

「まい」の成立は「まじ」を理解するため何より論駁の中心にある問題である。まず『口語法別記』では、終止形<まい>が連体形を兼ねるようになったと述べながら、連体形<まじ>が<まい>となったものとも見られると、既存の概念とは背馳する説を説いている。土井(1933)は、室町期の「まい」が「まじい」と終止形・連体形に併用され、後に「まい」によって統一されたもので、連体形<まじ>が<まい>となり、終止形を兼ねるようになったと説いている。ただ、この<まじ>が連体形にも用いられたと付言し、「まい」の成立についてまだ整えた立場は示していないようである。また大塚(1962)は、上代から深く関連していた「べし」との関係を考慮に入れ、「まい」は<まじい><べい>の総合影響により、終止・連体形の成立後完成されたと述べている。このような説に対して橋本(1955)は、「まじ」の形態上の変化は助動詞自体の性格よりも、上接する動詞における接続面の混乱がより左右するのであることを主張している。

上記のごとく、「まじ」の変遷においては多様な説が説かれているが、それは時代の断面に極限しているか、もしくは形態面・接続面などの研究方法に限定されているようである。そこで本稿では、上代から近世に渡って、活用・接続・意味の全般を観察することにより、「まじ」の変遷をより総括的に把握したいのである。

3. 用例のための資料

「まし」の時代別用例を調査するために用いたテキストは次の通りである。

○ 上代

『万葉集』（日本古典文学全集）

その他の用例は先行論文から抜粋。上代における「まし」の用例は用例数においても限定しており、説明を容易にするためその個所ごとに先行論文の用例を用いた。

○ 中古

『伊勢物語』『大和物語』（日本古典文学大系）

『平中物語』『大鏡』『竹取物語』『落窪物語』（日本古典文学全集）

『宇津保物語』（笠間書院）

『土佐日記』（土佐日記：本文及び語彙索引 笠間書院）

『源氏物語』（日本古典文学大成）

『紫式部日記』（紫式部日記用語索引 巖南堂書店）

『栄花物語』（栄花物語：本文と索引 武蔵野書院）

『枕草子』（枕草子総索引 右文書院）

『更級日記』（更級日記総索引 武蔵野書院）

『古本説話集』（古本説話集総索引 風間書房）

○ 中世

『保元物語』『新古今和歌集』『平治物語』『平家物語』（日本古典文学大系）

『沙石集』『曾我物語』『義経記』『風姿花伝』『老のすさみ』『閑吟集』（日本古典文学全集）

『十訓抄』（十訓抄：本文と索引 笠間書院）

『徒然草』（徒然草総索引 至文堂）

『天草版平家物語』 国立国語研究所

○ 近世

『好色一代男』 『好色五人女』 『好色一代女』 『去来抄』 『冥途の飛脚』 『妹背山婦女庭訓』 『五十年忌歌念仏』 『五十年忌歌念仏（近松門左衛門集）』 『謡曲集』 『狂言集』 『曾我会稽山』（日本古典文学全集）

Ⅱ．本論

1. 語源の研究

1.1 「ましじ」の発生

「まし」はその勢力が一番強かった中古における語形であり、上代においては「ましじ」という語形も使われていたという説がある。その「ましじ」が「まし」と併用されていたかについて日野(1964)は²⁾本居宣長・東条義門・物集高世の研究を次のように整理している。

- 本居宣長：「ましじ」の存在を推定はしているが、まだ断定はしていない。
- 東条義門：「ましじ」を認定し、「まし」と「ましじ」の共存した時代があったかのよう¹⁾に推定している。
- 物集高世：「ましじ」の存在を推定するに止まる。

上の研究から上代における「ましじ」の存在はある程度認めることができるようにはな²⁾ったが、どちらの説も「ましじ」を断定的に確信するほどの根拠は弱く、「ましじ」と「まし」の関係を十分に説明されてはいなかった。

そこで橋本(1951)^{a3)}は、

1 「まし」と「ましじ」は形態上の違いだけを有しており、

2) 日野資純(1964)「「ましじ」の研究史における「山口栗(やまぐちのしおり)」の位置」『人文論集15』早稲田大学法学会 p.57~61
3) 橋本進吉(1951)a「万葉時代の『まし』」『橋本進吉博士著作集5』岩波書店 p.104~119

- ② 上代文献の中で「まじ」として読まれていた例の全てを「ましじ」と読み替えることができ、
- ③ 「ましじ」は中古文献には1例もないし、
- ④ 雅俗を区分していた中古文献で「まじ」は主に物語・草子・日記に登場し、歌・勅撰集にはあまり使われていなかった

ことを根拠として、上代文献では「ましじ」だけが使われていたと説明している。上の中から②説については次の例を通して確認することができる。

- 菟怒嗟破赴以破能臂謎餓飢朋呂伽珥枳許嗟怒于羅遇破能紀予屢麻志枳箇破能区莽愚莽予呂朋譬喻玖伽茂于羅愚破能紀 (書紀・卷11)
- 耶麻古曳底于瀾倭柁留騰母於母之樓枳伊麻紀能禹知播倭須羅庚麻旨珥 (書紀・卷26)
- 保里延故要等保伎佐刀麻弓於久利家流伎美我許己呂波和須良由麻之目 (万・4482)
- 王等波己我得麻之岐帝乃尊岐宝位乎望求米 (続・卷30)
- 阿良多麻能伎倍乃波也之爾奈乎多弓天由伎可都麻思自移乎佐伎太多尼 (万・3353)

上記のいわゆる「まじ」の例は、異本によるか、仮名の読み方を変えれば全て「ましじ」の例として認めることができる例であり、

- 不言伎辞母言奴不為伎行母為奴 (続紀・卷24)
- 近江大津宮御宇大倭根子天皇乃与天地共長与日月共遠不改常典止立賜比敷賜霸留法乎受被賜坐而 (続紀・卷4)
- 又天地之共長遠不改常典止立賜霸留食国法母 (続紀・卷4)
- 真鉤持弓削河原之埋木之不可顯事等不有国 (万・1385)

これらの例などは「まじき」を「ましじき」と読み替えても差し支えない用例である。山田(1954)⁴⁾もまた、流布本には「まじ」「まじき」とある例も、他の本には「ましじ」と記されている点をあげ、上代文献上の「まじ」は誤写であろうことを主張しながら、「まじ」は「ましじ」が亡びてできた語形であろうと主張されている。

このように、上代における存在が認められた「ましじ」の語源については、**Ⓐ**推量の助動詞「まし」に打消推量の助動詞「じ」が付いてできたものとする説と、**Ⓑ**名詞的形容詞「うまし」に接尾語「じ」が付いてできたものとする説がある。橋本(1955)^{a5)}と浜田(1955)⁶⁾、後藤(1969)⁷⁾は**Ⓐ**説は語形の上から「まし」と「じ」の結合であろうと推定しているが、大野(1956)⁸⁾は

- 「ましじ」が三音節であるため単純に「まし+じ」の合成語とみるのは問題があり、
- 接続の面で「まし」は未然形に付き、終止形に接続する「ましじ」とは合わず、
- 推理的否定の意味が自然に発生しにくい

ということなどの理由から、**Ⓐ**説に反論を展開した。「ましじ」は推量助動詞「べし」の語源である「うべ(宜)」の古形の「うま」からきたとみて、「うべ」と「べし」と同じく「うま」と「まし」が存在した時代であろうと想定している。一番古い形の「うま」に形容詞接尾辞「し」が付き、これにまた原始的な否定辞である「じ」を直結して、「うましじ」という語形が発生したと述べられている。また、山崎(1964)⁹⁾は大野(1956)¹⁰⁾の説に加えて、「うま」が動詞の終止形に付くという事実から、「うましじ」の語頭の「う」

4) 山田孝雄(1954)『奈良朝文法史』宝文館出版 p.312

5) 橋本四郎(1955)a「上代の形容詞語尾ジについて」『万葉15』万葉学会 p.3

6) 浜田敦(1955)「助動詞」『万葉集大成6』平凡社 p.112

7) 後藤和彦(1969)「<ましじ>から<まじ>への推移」『万葉70』万葉学会 p.22

8) 大野透(1956)「ベシ・ベカラズ・マシジ・マシについて」『国語学25』武蔵野書院 p.86

9) 山崎馨(1964)「形容詞系助動詞の成立一その一、まし・ましじ・きー」『国語と国文学41』明治書院 p.59

10) 大野透(1956) 前掲書 p.86

音が上接する動詞の終止形の語尾の「-u」音と結合して省略されるようになり、上代の「ましじ」となったと述べられている。

どちらの説も現存する文献にはその姿が残っていないため、確実な確認は難しいのではあるが、上記のごとく**B**説は、**A**説の根拠に欠けているところと不合理を解消しており、**B**説で主張する「うましじ」を従うのが穏当であろうと思う。

1.2 「ましじ」から「まじ」への推移

上代の「ましじ」は中古の「まじ」に繋がる語形であるとみる見解が一般である。「ましじ」と「まじ」の語形の差は、もっぱら「し」の音の有無だけであるが、活用面で同じく、意味の面でも「まじ」の方が拡張してはいるものの、同じ意味合いを継承していると認められている。「ましじ」は「まじ」に比べて用例数に乏しく、共起する語彙も限定しているが、「まじ」が「ましじ」の後身であることを明らかにするために、変化の理由とその過程を考察する必要がある。

まず橋本(1951)a¹¹⁾は、音声的問題を考慮して、次のような説を説いている。「ましじ」は上に述べたように「まし+じ」から発生した助動詞であるが、助動詞は動詞に接続するという特性上、長い語形を避けようとする性質を有している。「ましじ」は3音節で当時の助動詞としては長い方に属しており、それに「し」の音と「じ」の音は発音の上で類似している環境にあった。しかし、「じ」は意味の面でも活用の面でも省きがたい特性を持っているため、長さからの縮小を要求されていた「ましじ」は、「し」の音を縮小して、音節数の縮まった「まじ」と変わるようになったと述べられている。

文献資料の上で、上代には「ましじ」だけがあり、中古に入り「まじ」が登場するが、この「ましじ」と「まじ」とが同時に用いられた文献は、今のうちでは見つからないのである。そのため、どういう過程を経て「ましじ」が「まじ」となったかについては、確

11) 橋本進吉(1951)a 前掲書 p.116

実に証明することは難しいのである。ただ、中古における「まじ」は歌・勅撰集等、伝統的言語意識の作用する文献にはあまり用いられていない。これは前代の「ましじ」から変わった新語形であるという認識によるものであろうと思う。

上代には漢文訓読体の「べからず」があり、また歌にも口語にも「じ」が幅広く用いられていた。その勢力の強い二つの語彙の中、まだ生まれたばかりとも言える「まじ」は、新語形であるという意識が作用していたと推定することには、あまり差し支えがないのではないかと考えられる。もし、「まじ」が上代から「ましじ」と一緒に使われていた語彙であり、偶然に上代の文献資料に登場していなかったとすれば、上代から馴染んでいる表現を、敢えて歌などに用いることを避ける理由はなかろうと考える方が自然であろう。

「ましじ」と「まじ」が同時に登場した文献資料がない限り、二つの変化の時期を把握したり、その継承の流れを綿密に観察することは非常に難しいことであろうが、以上の理由から中古の「まじ」が「ましじ」の後身たることは納得できると考えられる。「ましじ」と「まじ」の類似性については、これから活用・接続・意味の面からより詳しく検討していくことにする。

む松が根や遠く久しき言のみも名のみも我は忘らゆましじ

(万・431)

一日こそ人も待ち良き長き日をかしく待たえばありかつましじ

(万・484)

近くあれば見ねどもあるをいや遠に君がいまさばありかつましじ

(万・610)

常世にと我が行かなくに小金門にもの悲しらに思へり我が身は瘦
せぬ嘆くにし袖さへ濡れぬかくばかりもとなし恋ひば故郷にこの月ごろ
もありかつましじ

(万・723)

我が心ゆたにたゆたに浮き尊辺にも沖にも寄りかつましじ

(万・1352)

ま鉋持ち弓削の川原の埋れ木の顯はるましじことにあらなくに

(万・1385)

湊にさ根延ふ小菅ぬすまはず君に恋ひつつありかつましじ

(万・2470)

大野らにたどきも知らず標結ひてありかつましじ我が恋ふらくは

(万・2481)

明日香川水行き増さりいや日異に恋の増さらばありかつましじ

(万・2702)

龜玉の寸戸の林に汝を立てて行きかつましじ寝を先立たね

(万・3353)

堀江越え遠き里まで送り来る君が心は忘らゆましじ

(万・4482)

○ 連体形

不言伎辞母言奴不為伎行母為奴

(続紀・巻24)

玉等波已我得麻之岐帝乃尊岐宝位乎望求米

(続紀・巻30)

我が大君神の尊の高知らず布当の宮は百木茂り山は木高し落ち
激つ瀬の音も清しうぐひすの来鳴く春へは巖には山下光り錦なす花
咲きををりさ雄鹿の妻呼ぶ秋は天霧らふしぐれを疾みさにつらふ黄葉

散りつつ八千年に生れつかしつ天の下知らしめさむと百代にも
変はるましじ大宮所 (万・1053)
布当山山並見れば百代にも変はるましじ大宮所 (万・1055)

上に挙げた用例中『万葉集』の例は集中に登場する「ましじ」の全例であるが、例外なく終止形と連体形に用いられていることが分かる。上代の「ましじ」の制限的に用いられていた断面を確認することができよう。

2.2 中古：「ましじ」

中古の「ましじ」を山田(1952)¹⁴⁾は、「その変化完し」と言い、中古における「ましじ」が全ての活用形を完備していると説明している。終止形と連体形の二つの活用形だけを有していた「ましじ」から、「ましじ」の活用形はどのように拡張されたかについて、活用形別に用例数を調査し、どの時代よりも多く、また、盛んに用いられていた時期であることを把握してみたいのである。

14) 山田孝雄(1952)『平安朝文法史』宝文館出版 p.207

<表 2 >

作品名	未然形	未然形 (まじから)	連用形	連用形 (まじかり)	終止形	連体形	連体形 (まじかる)	已然形
伊勢物語	0	0	1	2	0	0	0	0
宇津保物語	1	1	43	5	17	88	10	21
土佐日記	0	0	1	0	0	1	0	0
大和物語	0	0	0	1	2	5	0	2
平中物語	0	0	0	1	2	2	0	0
源氏物語	0	0	85	73	37	310	12	23
紫式部日記	0	0	1	0	2	6	0	1
栄花物語	0	1	6	3	9	39	0	8
枕草子	0	1	6	1	12	20	0	9
大鏡	0	0	4	2	3	17	0	2
竹取物語	0	0	0	0	2	6	0	1
落窪物語	0	0	4	4	6	11	5	3
更級日記	0	0	2	0	0	1	0	0
古本説話集	0	0	0	0	1	8	0	4
合計	1	3	153	92	93	514	27	74

*各活用形において、後代との比較を容易に把握できるよう、カリ活用は別途表記する

- 未然形 「この人えまぬがれ給まじくば、をのれをころし給へ。…」
 (宇津保・国譲下)
- みかどにてこをもたらんも、めでたくもあるまじからん。
 (宇津保・楼の上上)

「えあゆむまじからんずらん」と泣かせたまふ。

(栄花・巻29)

及ぶまじからむ際をだに、めでたしと思はんを、死ぬばかりも思ひか
かれかし。

(枕・250段)

○ 連用形

このくにひと、きゝしるまじくおもほへたれども、

(土佐・巻11ウ)

「…おもてぶせなりとおぼさば、み給まじくこそはとなん」といはせ給
へば、

(宇津保・蔵開下)

人もたりて聞にくき事うちますましくはたあめるをつるにはさやうの事なく
て

(源氏・宿木)

おのづからさるまじく、あだなる様にもなるに侍るべし。

(紫式部・巻49)

「…かなきことなれど、人におとるまじく、聞こえたまひしを」とて、

(落窪・40)

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、

(伊勢・巻6)

明るくまで、えあるまじかりければ、たがふべきところにゆきけり

(平中・巻25)

○ 終止形

またあこをかく見置きて、われも心のどかにえあるまじ。

(宇津保・俊蔭)

男は、「かくはかなくてのみいますかめるを見捨てては、いづちもい
づちも、えいくまじ」、

(大和・巻148)

しか恵み申したまふなれば、御後見は心もとなかるまじ。

(源氏・東屋)

地下など思し召し憚らせたまふまじ。

(大鏡・巻109)

「おのれはえ取らすまじ。おのれ死にはべらむ時、…」

(落窪・巻8)

○ 連体形

「おほやけにかなふまじきものなり」とて、

(宇津保・俊蔭)

今はおはしますまじきなめりと、思ひ絶えて、

(大和・巻23)

生きとまるましき心地すれとの給ふもたのもしけなしや

(源氏・夕顔)

〈わが身の大納言になるましき報にてこそありけれ〉と、

(落窪・巻4)

おのを思さむ人は、歌をなむ詠みて得さすましき。(枕・81段)

一の宝なりける鍛冶工匠六人を召しとりて、たはやすく人寄り来まし

き家を作りて、

(竹取・巻6)

「きんぞ、えつかうまつりあはすまじかなる」

(宇津保・国譲中)

きこゆるにそいのちもえたふましかめるかのあかしにもかかる御こと

(源氏・若菜上)

〈これもいと苦しきことはあるまじかめれど、しばしのほども見るに、

(落窪・巻44)

○ 已然形

この人の心ざしのおろかならば、いづれにもあふまじけれど、これも

かれも、月日を経て家の門に立ちて、

(大和・巻147)

今日伊勢のみてぐらつかひ、かへるほど、のぼるまじければ、立ち

ながらぞ、

(紫式部・巻14)

給し中にまりなんえをよはすなりにしはかなきことはつたへあるましけれと

(源氏・蜻蛉)

いと天人などこそえ言ふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。

(枕・155段)

えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣きをり。

(竹取・巻22)

未然形〈まじく〉は調査したところでは、『宇津保物語』に1例だけで、「まじくば」といった表現で用いられている。この未然形〈まじく〉の存在を認められるかについては論駁があるが、詳しいことは2.2.1節において考察することにする。また、カリ活用の未然形〈まじから〉も3例に過ぎないが、用例上確実に登場している以上、認めない

理由はないと思う。その他の活用形においては連体形<まじき>が514例で全体の53.71%で一番多数の比率を占めており、次に連用形<まじく>が153例の15.99%でその後を追っている。かり活用の連用形<まじかり>も92例の9.62%で、連用形<まじく>と連用形のかり活用<まじかり>を合わせると25.60%となる。これは連体形<まじき>と連体形のかり活用<まじかる>を合わせた541例の56.53%の半分くらいとなる。連用形のかり活用<まじかる>は主に「めり」・「なる」などを下接し、「る」音が音便化した「まじかめり」・「まじかなる」の形で用いられた。この連用形と連体形を合わせると「まじ」全体の82.13%でそれ以外の活用形が約20%を占めている。この数値から、中古における「まじ」の活用は連用形と連体形に集中され、その中でも主に連体形で用いられる比率が高いことが分かる。

連用形<まじく>は音便形<まじう>とも使われ、調査したところでは連用形<まじく>153例中、<まじう>は3例ある。

- 昔、男、思ひかけたる女の、え得まじうなりての世に、 (伊勢・巻55)
- いと世になう、あるまじうおぼえたまひて、よろづに語りひたまふほどに、夜も明けぬ。
(落窪・巻21)
- この度は、いと類ひろければ、え宿るまじうて、野中にかりそめに庵作りてすゑたれば、
(更級・巻28)

この連用形の音便形<まじう>が実際盛んに用いられるようになるのは、中世に入ってからである。

2.2.1 助動詞「ず」と「べし」における未然形の認定

中古の「まじ」の活用形の中、未然形<まじく>を認められるべきかについての問題を解決するために、形容詞型活用をする助動詞のうち、「ず」と「べし」を合わせて考

察する。「ず」は、助詞「は」の付いた語形における解釈の問題で多様な論駁が行われてきており、この「は」の解釈によって未然形の認定有無が分けられる。「べし」は、語源から「まじ」と深く関係しており、意味上でも反対の関係にある助動詞である¹⁵⁾ため、この二つの助動詞を考察することにより、「まじ」における未然形の問題が解決できると思う。

まず、「ず」に「は」の付いた「ずは」の解釈をめぐる、連用修飾と仮定条件のどちらに解した方が妥当であるかが論じられている。橋本(1951)b¹⁶⁾は、上代は清音の「は」と濁音の「ば」を区分していた時代であり、「ず」は上代に連用形と終止形の二つの活用形だけを有していた点を根拠として、「ずは」の「は」は清音であるし、助詞「は」は終止形には付くことができないため、「ずは」に付いた「は」は係助詞であり、連用修飾と見て未然形<ず>の存在を否定する立場を示している。しかし、金(2003)¹⁷⁾によると、もともと助詞「は」に係助詞・接続助詞という区別があったのではなく、音韻変化により接続助詞は「ば」と音価が変わったが、「ずは」の場合はそのような音韻変化がないまま、同じ清音の形で「仮定条件」と「連用修飾」の用法として用いられたと述べている。そして、その区別は、構文の構造・明確な文意によって判断すべきであるとし、次の『万葉集』の用例¹⁸⁾など

- かくばかり恋つつあらずは石木にもならましものを物思はずして (万・722)
- さす竹の節隠りてあれわが背子が吾許し来ずはわれ恋ひめやも (万・2773)
- 衣手にあらしの吹きて寒き夜を君来まさずは独りかも寝む (万・3282)
- 中洲に浮き居る船の漕ぎて去ば逢ふこと難し今日にしあらずは (万・3401)
- 真楫貫き船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦にやどり為ましを (万・3630)
- わが袖は手本とほりて濡れぬとも恋忘れ貝取らずは行かじ (万・3711)

15) 塚原鉄雄(1957)「推量の助動詞—その国語史的考察」『国語国文26』星野書店 p.142

16) 橋本進吉(1951)b「奈良朝語法研究の中から」『上代語の研究』岩波書店 p.151

17) 金沅基(2003)「「ずは」の意味と文法的解釈—『万葉集』の用例を中心として—」『日本学報54』韓国日本学会 p.84

18) ここに挙げた『万葉集』の用例は「金(2003)」によるものである。

- 此の頃のわが恋力給らずは京兆に出でて訴へむ (万・3859)

のように、仮定条件で解すべき例があることから、「ずは」の「は」は接続助詞であり、未然形<ず>を認めるべきであると説明している。

次に、「べし」の場合はいかがであろうか。福島(1959)¹⁹⁾は、未然形<べく>を括弧で示しながら、形容詞の未然形と同様にその存在を認められないとしている。その根拠として、

- ゆくほたる雲の上までいぬべくば秋風吹くと雁につげこせ (伊勢・巻46)

の例を挙げ、「べくば」は謡曲やキリシタンのローマ字では「べくは」と清音で発音されており、これは連用形「べく」に副助詞「は」がついたものであるとしている。しかし、意味においては、「行けそうなら」と仮定の気持を表していると言われている。一方、山田(1957)²⁰⁾は福島(1959)と同じ用例を未然形の例として挙げながら、「べくは」と清音で表記し、未然形<べく>の存在を認めている。また、湯沢(1959)²¹⁾は、

- 法花問答講一定あるべくば、三年が命を延べて奉らん。 (平家・巻1)
○ こはいづちへやらん。同じう失なはるべくば、都近き此辺にてもあれかし」と宣ひけるぞ (平家・巻2)

と、濁音の「ば」の付いた「べくば」を未然形の用例として挙げている。どちらも意味として仮定条件に解した方が自然であり、「べく」に付く「は」もしくは「ば」を清濁の問題から意味を分けることには無理があるように思われるため、これは接続助詞である

19) 福島邦道(1959)「七、『へし』の研究」『国文学解釈と教材の研究4・2』学灯社 p.123

20) 山田孝雄(1957)「ま、べし」『国文学解釈と鑑賞33』至文堂 p.77

21) 湯沢幸吉郎(1959)『文語文法詳説』右文書院 p.317

と見る方が穏当であると考えられる。22)以上のような見解から見ると形容詞型活用をする助動詞「ず」と「べし」の未然形<ず><べく>の存在は十分認められよう。

では、未然形<まじく>の問題に戻りたいのであるが、中古における未然形の例を見よう。

○ 「この人えまぬがれ給まじくば、をのれをころし給へ。…」

(宇津保・国譲下)

これも「…免れることができなければ」と仮定条件として解釈した方が自然な用例であり、連用修飾として「…死ぬことが免れないでは」と解釈するのは無理のようである。この文にも濁音「ば」として「まじく」に付いているものの、解釈の面からこの「ば」は接続助詞「は」と同じものであり、未然形<まじく>の存在を認められる証拠例である。未然形<まじく>の存在を認めない立場からはこの「ば」を前代の係助詞「は」と認めるのがいいと主張しているが、この文では接続助詞「ば」のまま解釈した方が意味が通じ、未然形<まじく>は例は少ないものの未然形の存在したことを認めるのが穏当であると思うのである。

ここまでの調査を通して、中古の「まじ」は全ての活用形において用いられており、また、活発な生命力を保っていたことが確認できた。上記の内容に即して活用表を作成してみると次のようにした方が妥当ではないかと思う。

22) 松村明(1969)『(古典語現代語)古典語現代語助詞助動詞詳説』学灯社 p.208
平安時代に「べく+は」の仮定法が起ったものであると言及している。

<表 3 >

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ

2.3 中世：「まじ」「まじい」「まい」

中世に入り、「まじ」の活用面に大きな変化が発生する。「終止・連体形の合一」²³⁾という言語歴史における巨大なる変化の流れの中、「まじ」もまた本来の語形を保ちがたくなり、「まじ」「まじい」「まい」の三つの形に分化するようになる。その変化について『口語法別記』²⁴⁾では、二つの可能性を言及している。

①終止形<まじ>が<まじい>となり、終止形<まじ>が<まい>となって、連体形<まじき>が<まい>となったのは異例である。終止形<まい>が連体形を兼ねるようになったのである。

②連体形に用いた<まじ>が<まい>となったものとも見られる

①は他の動詞・助動詞の連体形が終止形を兼ねるようになったのと反対であることを認めていながらも、「まじ」の変化は終止形が連体形を兼ねるようになったと主張しており、既存の概念とは矛盾している。土井(1933)²⁵⁾はこの中から②説だけを取り上げ、「まじ」が「まい」となって終止形をも兼ねた意見に従うべきであるとしている。これについて、さらに大塚(1962)²⁶⁾は、上の二つの説をさらに整理して次のような二つの

23) 山内洋一郎(2003)「4.連体形終止の関連語法—3.終止・連体形と助動詞「ベシ・マジ—現代語「マイ」の接続不整の源—」『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版 p.238

「終止・連体形の合一」は、終止形終止の消滅を伴い、終止形が果たしていた文法機能に影響を与える。これによって、終止形接続をする助動詞「べし」「まじ」が、終止形ではなく他の活用形に接続する動きを起こる。

24) 国語調査委員会(1917)『口語法別記』国定教科書共同販売所 p.255

25) 土井忠生(1933) 前掲書 p.96

仮説を立てている。

③終止形<まじ>が<まい>と形態を変化した後、終止形<まい>が連体形<まじき>の領域を犯したか、

④終止形<まじ>が連体形<まじき>の領域を犯してから、終止・連体形<まじ>が終止・連体形<まい>と形態を変えたのか

しかし、この③④どちらも終止形が連体形の領域を犯したことが先に発生し、その次の変化へとつながったということを前提としており、それに『口語法別記』は音声の変化を問題としているところに止まることを批判しながら、「まじ」から「まい」への変化を直線的に考える見解を指摘している。そこで、「まじい」の存在と「べし」の後身である「べい」の存在をも考慮に入れないといけなことを提案している。²⁷⁾坪井(2001)²⁸⁾も、「まい」の成立は単なる「自然な」音変化とは十分な説明ができないと述べ、次のように説明している。上代の語源からも深く関係があり、意味の面で反対の関係でもあるし、また、終止形が同じであった<まじ>と<べし>が「イ」音便化により<まじい>と<べい>とで語形に相違ができる。その<まじい>と<べい>が各々<まい>と<べしい>の成立に相互影響を与えたとのことである。これは1章で説明した「ましじ」の語源の「べし」との関係から考え、従うに値する説であると思う。

26) 大塚光信(1962)「助動詞マイの成立について」『国語学50号』武蔵野書院 p.64

27) 大塚光信(1960)「べしとマイ」『国語国文29』星野書店 p.21

28) 坪井美樹(2001)『日本語活用体系の変遷』笠間書院 p.40

「あら浅猿し。これまでも参るまじかりけるに、御とがめにや」と胸さわぎで恐れ思ふ程に、
(沙石・巻1)

○ 終止形

たゞのびに延ければ、「ねたきはねたけれども、是に限るまじ。判官殿は、口こそ利きたまふとも、はかばかしき事よもあらじ。…」

(保元・中)

命があるまじければ、今生のおもひではあるまじ。
(保元・中)

この勢一所にてはかなふまじ。いとまとらすぞ。

(平治・中)

「その御すがたにてはかなふまじ。」とて、
(平治・下)

「此若公の父三位中将殿は、初度の戦の大將也。誰申共叶まじ」との給ひつれば、
(平家・巻11)

唐の物は、薬の外はなくとも事かくまじ。
(徒・巻120)

さらば昼は叶ふまじ。寅の時に参りて、辰の時に形の如く舞ひて帰らばや
(義・巻6)

何となく怒れるよそほひあれば、神体によりて、鬼がかりにならんも苦しかるまじ。
(風姿・2)

長き命ぞ恨みなる大恨みは数々多けれどもよしよし申すまじ。

(閑・仮名序)

○ 連体形

おも影の忘らるまじき別れかななごりを人の月にとゞめて

(新古今・巻13)

打ち出で、駆けんとせられければ、鎌田次郎、「これあるまじき御事にてこそ候へ。…」

(保元・中)

さては乙若殿もなくべからず。我もなくまじきなり。

(平治・下)

すべて人の頼むまじきものは次の者にて

(義・巻2)

スヘテ文ハイツモケナルマシキ也。

(十訓・巻7)

傷害のをそれおはしますまじき御身にて、

(徒・146段)

妻といふ物こそ、をのこの持まじき物なれ。

(徒・190段)

越前国をば子々孫々まで御変改あるまじき由、 (平家・巻3)

座敷の競ひ後れを勘へて見る事、その道に長ぜざらん人は、左右
なく知るまじきなり。 (風姿・3)

○ 已然形

汝此日来情有てあたりつるこそ、いかならん世迄も思召忘るまじけ
れ。 (保元・上)

緒を締め、馬の足を立て直し、さてはえこそをし申まじけれ。早々
御帰り候へ。哀れ詮なき御事かな。 (保元・中)

「…そのゆへは、終にはかくれあるまじけれども、まさう此有様きい
て、…」 (平家・巻12)

一人罷タリトモ疑オホシメスマシケレト、 (十訓・巻4)

物がたりするさまこそ、何事にかあらん、つきすまじけれ。

(徒・105段)

中世の「まじ」は連体形と終止形の二つだけの活用形に集中されていることが分かる。終止形<まじ>が全体の37.54%、連体形<まじき>が全体の50.16%で、二つの活用形を合わせると全体の87.7%にまで至る。他の活用形は連用形<まじく>が2.59%、已然形<まじけれ>が6.47%でそれ以外は1~2%くらいである。中古にもその存在を疑われていた未然形<まじく>は、調査したところでは用例が一つもなく、未然形のかり活用<まじから>だけが1例ある。ほぼ全ての活用形にわたって用いられていた中古に比べると、活用語としての勢力が著しく縮まっていることが分かる。終止形<まじ>と連体形<まじき>が高い比率を占めているとは言うものの、その使用にはまた制限があったように思われる。下接する語を見ると、上に挙げた用例のように終止形<まじ>は活用形
の特性上文末に多用されるのは当たり前であるが、連体形<まじき>は中古には一般
名詞に自由に接続していたが、中世には主に「こと」「もの」などの形式名詞や助詞
に接続する様子となる。これは中世に入って発達した新しい助動詞にその席を譲り、口
語ではあまり用いられなくなったことを反証するのではないかと思うが、確実な証明のため

には当時の口語資料との幅広い比較が必要となり、今後の課題として残して置くこととする。ただ、用例数から助動詞「まじ」の勢力が弱まったことは十分確認できたと思う。

終止形<まじい>の用いられた例は大系本『義経記』に「一所にてはかなふまじひ。」と1例あるが、これはまた全集本では<まじ>と表記しており判断し難い用例である。また、連体形<まじ>は調査したところでは『閑吟集』に「馴れまじものぢや」でたった1例あるに止まるが、中世末期に編纂された『天草版平家物語』には「まじ」「まじい」「まい」3語形が全部用いられている。上村(1973)²⁹⁾による『覚一本平家物語』と『天草版平家物語』の対照³⁰⁾によると、「まじ」が9例、「まじい」が79例と「まい」が81例用いられており、『覚一本平家物語』の「まじ」が『天草版平家物語』に「まじい」と書かれたのは合計16例で終止法が10例、連体法が6例であり、『覚一本平家物語』の「まじ」が『天草版平家物語』の「まい」に代替されたのは合計22例で、終止法17例、連体法2例、「まいぞ」3例である。「まじ」が「まじい」と書かれた用例の中、連体形<まじき>が終止形<まじい>となったのが4例で、「まじ」が「まい」となった例の中、連体形<まじき>が終止形<まい>となった例が3例ある。

この用例数から、「まじ」の勢力は、漸次「まじい」と「まい」に置き換えられていったことが分かり、また、連体形が終止形の領域を犯したということが証明できると思う。これは連体形<まじき>が終止形<まじ>の領域を犯したという、大塚(1962)³¹⁾の仮説を裏付ける証拠になるのではなかろうか。『覚一本平家物語』における連体形「まじ」が『天草版平家物語』に終止形「まじい」「まい」になった例はあるものの、その反対の場合はないことから、連体形<まじき>が終止形<まじ>の領域を犯したことが先に起きたということが類推できると考えられる。

29) 上村良作(1973)「『天草版平家物語』における<まじい><まい>について」『今泉博士古希記念国語学論叢』桜楓社 p.377

30) 『覚一本平家物語』は室町初期に編纂され中世中期の言語の把握に容易であり、『天草版平家物語』は室町末期1592年書かれた書籍で近世に入る直前の物である。約300年の時間差を置いて書かれた同じ作品に対する翻訳であるため、その中に用いられた表現の対照に適当している。

31) 大塚光信(1962) 前掲書 p.65

このように変化の渦の中にあった「まじ」「まじい」「まい」であったが、同時に勢力が弱まっていったことも活用別分布から確認することができた。この「まじい」と「まい」も徐々に形態上の違いがなくなり「まい」として吸収され、「まじ」は無変化助動詞となっていくこととなる。中世の「まじ」の活用を表にすると次の通りである。

<表 5 >

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
○ まじから	まじく まじかり	まじ まじい まい	まじき まじい まい まじかる	まじけれ

2.4 近世：「まじ」「まい」「まじい」

室町後期から「まい」と同義で終止・連体形に用いられていた「まじい」は、「まい」によって統一されるようになる。³²⁾近世においては「まじい」の例がわずかであり、伝統的表現とも言える「まじ」と、新しい語形の「まい」が併用されるようになる。まず、「まじ」「まい」「まじい」の用例数は次のようである。

³²⁾ 土井忠生(1933) 前掲書 p.92

<表 6 >

作品名	終止形			連体形	
	まじ	まい	まじい	まじき	まい
好色一代男	12	4	0	8	2
好色五人女	9	0	0	10	0
好色一代女	4	3	0	8	0
去来抄	8	0	0	5	0
冥途の飛脚	5	11	0	0	4
妹背山婦女庭訓	4	21	0	0	5
曾我会稽山	13	10	1	2	1
合計	55	49	1	33	12
	104			45	

[まじ]

○ 終止形

をんな赤面して、「よもやただ事とは人々も見まじ」、とくと心をしづめ、御脇ばらなどをはばかりながらなでさすり、 (一代男・巻1)

この女がその太夫にてこれ程自由にならば、もつともおもしろかるまじ
(一代男・巻3)

三途川の姥も、これみたらば欲をはなれ、高麗橋の古手屋も、ねうちなるまじ。
(五人女・巻1)

この大神楽は作り物にして、手くだのために出しけるとは、かしこき神もしらせ給ふまじ。
(五人女・巻1)

きやつは木で鼻、もぎだう者、たゞは言ふまじ、濡れかけて。
(冥途・上之巻)

詞なに采女様御行方知れずとや。ム、何にもせよ、程はあるまじ。
(妹背・第一)

- 連体形 いつも独寝のうらみ、いはねばこそなれ。太鼓持の女房にはなるまじ
き物とおもふぞかし (一代男・巻6)
- 油断のならぬ世の中に、殊更見せまじき物は、道中の肌付金、酒
の酔に脇指、娘のきはに捨坊主と、 (五人女・巻1)
- なほ年をかさね勤めての後は、かならず悪しかるまじき身を、十一歳
の夏はじめよりわけもなく取乱して、 (一代女・巻1)

[まい]

- 終止形 なほやめがたく一世の約束して、「見すてな」、「捨てまい」、
末は千とせの松陰に木隠れ、かかる所へ、 (一代男・巻3)
- こなた、住吉の祭を見さしやつた事があるまい。(一代女・巻4)
- これ、お使ひ。八右衛門様がそのやうに理屈臭い口上はあるま
い。(冥途・上之巻)
- 詞ア、いかう気が滅入る。わつざりと浄瑠璃にせまいか。
(冥途・中之巻)
- 奉納ありしは余人でない。覚えなるとは言はれまい。
(妹背・第一)
- わたしが用がたあんとござんす。お前のお世話にはなるまいし。構う
て下さんすな。(妹背・第四)
- 連体形 これおもふに、仮にも書かすまい物はこれぞかし。
(一代男・巻4)
- 「これはおもうたと各別の違ひ。かみさまへの奉公ならば、こまいも
の」と悔し。(一代女・巻4)
- 曾我を引く御前通路の割符の札。彼等が手に入るまい物でなし。
(会稽山・8)

[まじい]

- 終止形 よし、さもしげに言ひ訳はすまじいぞ。(会稽山・19)

調査に用いた資料内では、終止形と連体形以外の用例は1例もなく、一括して終止形と連体形に用いられていた。特に、「まい」の場合、語形において活用形の変化がなく、固定しているのが分かる。割合としては、終止形の場合、「まじ」が55例で52.88%と、「まい」が49例で47.11%でほぼ同じ比率を占めており、「まじい」は1例で0.97%に止まっている。連体形の場合では、「まじき」が33例で73.33%を、「まい」が12例で26.66%を占めており、終止形とは違って「まじ」の連体形<まじき>が約3倍となっていることが分かる。また、調査した資料の中には連体形<まじい>は現れていなかった。このように、終止形と連体形以外の活用形は見え、「まい」と「まじい」を含めた「まじ」系の表現は、もう活用語としての衰退の道に入っていたことが類推できよう。

一方、湯沢(1936)³³⁾は、近世における「まじ」は、当期の実際の対話には既に廃れていたとし、また、「まじい」も口語の普通の形ではなかったことを言及している。その通り、調査に用いた資料は大部分文語を用いて書かれているテキストであるため、その当時の口語までを把握するには不十分であった。近世における調査資料の不足のため、口語と文語における差違までには触れることができず、これは今後の課題としたい。しかし、このような変化が、現代の無変化助動詞「まい」を成立させる土台となったことは十分確認できたと思うのである。近世の活用をまとめると次のようである。

<表 7 >

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
○	○	まじ まい まじい	まじき まい	○

33) 湯沢幸吉郎(1936)『徳川時代言語の研究』風間書房 p.413

2.5 副読本の考察

まず、13の副読本から提案する活用表をまとめると<表8>のごとくである。

<表 8 >

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
①	(まじく) まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
②	○ まじから	まじく まじかり	まじ ○	まじき まじかる	まじけれ ○	○ ○
③	まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
④	まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
⑤	まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
⑥	まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
⑦	まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
⑧		まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
⑨	まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
⑩		まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
⑪	まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○
⑫	まじく (まじから)	まじく まじかり	まじ	まじき (まじかる)	まじけれ	○
⑬	○ まじから	まじく まじかり	まじ ○	まじき まじかる	まじけれ ○	○ ○

*副読本は①馬淵和夫(1995)『<詳解>古典文法〔改訂版〕』桐原書店、②築島裕(1999)『精選古典文法改訂版』明治書院、③松廷市次(1998)『基礎の古典文法』桐原書店、④桜井光昭(1996)『<活用>古典文法』桐原書店、⑤中村幸弘・宮原俊二(1993)『文語文法マスター』日驗刊、⑥松村明・坂梨隆三(1999)『チェックシートわかりやすい古典文法改訂版』明治書院、⑦小島昌光(1999)『<基礎から解釈へ>新しい古典文法』桐原書店、⑧秋本守英・渡辺輝道(1998)『新・古典の文法』中央図書、⑨北原保雄(1998)『古典にいざなう新古典文法』大修館書店、⑩田辺正男(1998)『新訂古典文法』大修館書店、⑪塚原鉄雄(1988)『新講古典文法』親展社、⑫岩淵悦太郎(1990)『文語の文法』秀雄出版、⑬坂倉篤義・堀口和吉(1981)『新修文語文法』京都書房による。

これをまた分類別にまとめたのが次の<表9>である。

<表 9 >

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
①	(まじく)	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
	まじから	まじかり		まじかる		
②	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
	まじから	まじかり		まじかる		
③	○	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
	まじから	まじかり		まじかる		○
④	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
	(まじから)	まじかり		(まじかる)		

①には①、②には③④⑤⑥⑦⑪、③には②⑧⑨⑩⑬、④には⑫が属すると分類できる。この分類で問題となるのも、また未然形である。まず、①では未然形<まじく>を

部分的に認めており、②ではくまじく>を含めた全ての活用形を認めている。また、③は未然形くまじく>を認めておらず、④は①とは逆にカリ活用の未然形くまじから>を部分的に認めており、カリ活用の連体形くまじかる>も部分的に認めている。これについて②に属する⑥では、「未然形くまじく>は「まじくば」の表現で用いられ、この「まじくば」の「ば」は古代の「まじくは」であったところから、この「は」は係助詞であり、未然形と分類しているくまじく>は連用形である」として、未然形の存在を認めない考え方もあると付言している。しかし、上の2.2.1節で考察したように、未然形くまじく>はその存在が認められ、活用表から省けないと思われる。ここで、形容詞型活用をする他の助動詞について、各副読本ごとにその未然形く->の存在を認めているかを調査してみると次のようになる。

返し入れ奉れ。 (平家・巻10)

- ごとし 中宮御惱の御こと、承り及ぶごとくんば、殊更成親卿が死霊など聞え候。 (平家・巻3)

全て仮定条件の意味として解釈すべき例であり、特に「ごとし」の場合は、「ん」の介入により濁音「-ば」になっており、これは清濁の差違から意味の違いが招かれることではないという根拠になるのである。このような用例からも未然形<-く>は認めるべきであり、「まじ」の未然形「まじく」の存在は活用形の一つとして認めるのが妥当であろう。

このような副読本の分類と、2.2節の中古、2.3節の中世の調査をまとめると、

<表 11 >

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ

上のごとく提案できよう。このような全ての活用形を提示することにより、学習者に「まじ」の活用を十分理解してもらえると考えるのである。

3. 接続の研究

3.1 上代

上代の「ましじ」は用例数は少ないが、その用例はいわば整えた接続法を保っている。

- 菟怒瑳破赴以破能臂謎餓飫朋呂伽珥枳許瑳怒于羅遇破能紀予屢麻志枳箇破能区莽愚莽予呂朋譬喻玖伽茂于羅愚破能紀 (書紀・卷11)
- 耶麻古曳底于瀾倭柁留騰母於母之楼枳伊麻紀能禹知播倭須羅庾麻旨珥 (書紀・卷11)
- 王等波己我得麻之岐帝乃尊岐宝位乎望求米 (続紀・卷30)
- 玉くしげみもろの山のさな葛さ寝ずは遂にありかつましじ (万・94)
- 直に逢はば逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ (万・225)
- 古にありけむ人の倭文機の帯解き交へて廬屋建て妻問ひしけむ葛飾の真間の手児名が奥つきをこことは聞けど真木の葉や茂りたるらむ松が根や遠く久しき言のみも名のみも我は忘らゆましじ (万・431)
- 一日こそ人も待ち良き長き日をかしく待たえばありかつましじ (万・484)
- 近くあれば見ねどもあるをいや遠に君がいまさばありかつましじ (万・610)
- 常世にと我が行かなくに小金門にもの悲しらに思へり我が身は瘦せぬ嘆くに袖さへ濡れぬかくばかりもとなし恋ひば故郷にこの月ごろもありかつましじ (万・723)
- 我が大君神の尊の高知らす布当の宮は百木茂り山は木高し落ち激つ瀬の音も清し

うぐひすの来鳴く春へは巖には山下光り錦なす花咲きををりさ雄鹿の妻呼ぶ秋は天霧
らふしぐれを疾みさにつらふ黄葉散りつつ八千年に生れつかしつ天の下知らしめさ
むと百代にも 変はるましじき大宮所 (万・1053)

○ 布当山山並見れば百代にも変はるましじき大宮所 (万・1055)

○ 我が心ゆたにたゆたに浮き蓴辺にも沖にも寄りかつましじ
(万・1352)

○ ま鉋持ち弓削の川原の埋れ木の顯はるましじことにあらなくに
(万・1385)

○ 湊にき根延ふ小菅ぬすまはず君に恋ひつつありかつましじ
(万・2470)

○ 大野らにたどきも知らず標結ひてありかつましじ我が恋ふらくは
(万・2481)

○ 明日香川水行き増さりいや日異に恋の増さらばありかつましじ
(万・2702)

○ 籠玉の寸戸の林に汝を立てて行きかつましじ寝を先立たね
(万・3353)

○ 堀江越え遠き里まで送り来る君が心は忘らゆましじ
(万・4482)

上記の例で分かるように四段動詞「よる」・補助動詞「かつ」・下二段動詞「得」など、活用形の終止形に接続する以外の例は見当たらない。漢文訓読による後世の読み方までは把握できないが、当時一文字ずつ当て字で書かれている資料のうちでは例外なく原則に従っている。

3.2 中古

動詞及び助動詞の終止形に接続することを基本とする。(但し、ラ変活用動詞・形容詞・形容動詞には連体形に接続する。)

<表 12 >

作品名	終止	連体
伊勢物語	0	1
宇津保物語	89	76
土佐日記	1	1
大和物語	8	1
平中物語	2	3
源氏物語	277	225
紫式部日記	6	4
栄花物語	37	19
枕草子	37	12
大鏡	9	19
竹取物語	5	3
落窪物語	25	7
更級日記	2	1
古本説話集	8	3
合計	506	375

<表12>は接続別の用例数を表したもので、例外なく終止形と連体形の二つの活用形にのみ接続していることが分かる。調査したところではこれ以外の例外はなかったため、表に他の項目は省いた。次に<表13>、<表14>は上の終止形・連体形別の詳細な用例数である。

<表 13 >

作品名	四止	上一止	上二止	下二止	カ止	サ止	ナ止	助) 四止	助) 下二止
伊勢物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宇津保物語	50	4	1	15	3	8	0	1	7
土佐日記	1	0	0	0	0	0	0	0	0
大和物語	7	0	0	0	0	0	0	1	0
平中物語	2	0	0	0	0	0	0	0	0
源氏物語	169	1	0	89	3	12	1	0	2
紫式部日記	5	0	0	1	0	0	0	0	0
栄花物語	25	1	0	2	1	5	0	3	0
枕草子	23	2	0	9	1	0	0	0	2
大鏡	6	0	0	1	0	1	0	0	1
竹取物語	3	1	0	0	0	1	0	0	0
落窪物語	15	0	0	7	0	3	0	0	0
更級日記	2	0	0	0	0	0	0	0	0
古本説話集	5	0	0	3	0	0	0	0	0
合計	313	9	1	127	8	30	1	5	12

*表における項目は略語で表記した。四止＝四段動詞の終止形、上一止＝上一段動詞の終止形、上二止＝上二段動詞の終止形、下二止＝下二段動詞の終止形、カ止＝カ変活用動詞の終止形、サ止＝サ変活用動詞の終止形、ナ止＝ナ変活用動詞の終止形、助) 四止＝四段活用助動詞の終止形、助) 下二止＝下二段活用助動詞の終止形である。

- 四止 人もたりて聞にくき事うちますましくはたあめるをつるにはさやうの事なく
て (源氏・宿木)
いとあはれにかたじけなく、なにごともおぼすまじく、よろづにこの御心
の、かうもてなしたまふにこそあれ。 (宇津保・楼の上上)
この男、はた、えいふまじきやうにぞありければ、女をぞ、ひたみち
につらしと思ひける。 (平中・恋の禍)
大きな障りなれば、なほ仕うまつるまじきことを、 (竹取)
- 上一止 源氏のおとときしめしてともあれかくもあれ人みるましくて
(源氏・野分)
ここにも、人は見るまじうやは。などかはさしもうちとけつる
(枕・6段)
- 上二止 「たゞいふ事をいなふまじきばかりなり。…」
(宇津保・内侍のかみ)
- 下二止 思ひ捨つまじき人の侍れば、〈君に譲りきこえむ〉と思ひて。
(落窪・卷19)
心にもえまかすましくなんありける (源氏・空蟬)
御ありさまをみてはさらにかた時たふましくのみおしくかなしかる
(源氏・若菜下)
司召に少々の司得て侍らむは、何ともおぼゆまじくなん」と言へ
ば、 (枕・78段)
- カ止 かかる人もいてくまじきにやとやむことなきものに
(源氏・浮舟)
- サ止 しかすまじきよし、すみやかに言はせむ。 (大鏡・卷87)
『…世にえ侍るまじくのみ覚えしかば、かくてもえたいめんすまじきに
や』となげかれて、 (宇津保・国譲中)
「このことならずとも、『わたりたまへ』とあらむは、おはすまじくやあ
らむ。 (落窪・卷4)
- な止 猶おり給へこの人たすけ給へさすかにけふまでもあるはしぬまじかりけ

る (源氏・手習)

- 助) 四止 今はおはしますまじきなめりと、思ひ絶えて、 (大和・巻23)
異人の稚児ならば、かくもおはしますまじけれど、院の御心ばへの
いとかたじけなく、 (宇津保・楼の上下)
ただ今いとかくもおはしますまじきほどに、かくはかなきさまになりたまひ
ぬるは、 (栄花・巻8)

- 助) 下二止 心ちすれとつれなくすくよかにて人にきかすましと侍つることをきこえさせ
ん (源氏・藤袴)
しかあらむとき、忠こそらをたづねらるまじきものなり。

(宇津保・忠こそ)

この入道殿の御栄えの分けらるまじかりけるにこそは。

(大鏡・巻153)

(紫・巻50)

- 形) ラ体 顔しるかるまじき局の人して、これ中納言の君の御局より左京の君に奉らんと、高やかにさしおきつ。(紫・巻40)

人めみくるしかるましくはすたれもひきあけてさしむかひ

(源氏・宿木)

- 助) ラ体 常なるまじき御ことどもをのみあれば、(栄花・巻6)
宮たちまだ幼くおはしませば、何とも思したるまじけれど、おほかたのひびきにいみじう泣かせたまふ。(栄花・巻1)

- かり) ラ体 あしかるまじきことなれば、さやうに思しめしたれど、

(栄花・巻9)

- 形動) ラ体 あやしき思ひしはけにおろかなるまじきわさなりけりと

(源氏・宿木)

「よる」・「かつ」「得」など、いくつかの語彙に接続して、限定的な意味を生じていた上代に比べ、中古の「まじ」は多種多様な活用語に接続していることが分かる。これは4章の意味においても有意義なことで、多様な活用語に接続できたということは、その分、広範に用いられたとのことで、当時の言語生活に深く染みていたことの反映であろう。中古の「まじ」の接続をまとめると次のごとくである。

-活用語の終止形に接続する。

-ラ変型活用語の連体形に接続する。

3.3 中世

中世の「まじ」は、活用面と等しく接続面においても大きな揺れが起きる時期である。この時期に主な影響を与えたのは「終止・連体形の合一」で、これが接続面における混乱を引き起こしたのである。連体形が終止形の領域を犯したということは2章の活用面

でも言及しているが、接続面においても「まじ」が接続する活用語の変化により、「まじ」は既存の接続法を保ちがたくなる。この変化について橋本(1955)b³⁵)は、連体形と終止形が同一の形で示されるのは小音節の活用語に接続する場合に目立つことに触れ、音節数が短ければ短いほどその形が不安定であり、崩れる傾向が著しかったと説明している。ここでまず、中世における「まじ」の接続の用例数を察してみることにする。

<表 15 >

作品名	未然形	終止形	連体形
保元物語	2	5	3
新古今和歌集	0	1	0
平治物語	0	9	0
十訓抄	1	18	9
沙石集	0	19	8
平家物語	0	61	21
徒然草	0	9	1
曾我物語	2	36	8
義経記	2	90	25
風姿花伝	4	19	23
老のすさみ	0	4	0
閑吟集	1	3	0
合計	12	274	98

<表15>を見ると、中古までには見当たらない未然形接続があることが分かる。各接

35) 橋本四郎(1955)b 「ベシ・マジの接続面の混乱」 『国語学22』 武蔵野書院 p.52

橋本は、この変化は短い動詞が不安定で崩れる傾向が強いことを示しており、短い動詞では崩れた形の出ることに対する抵抗感が少なかったことを示しているのであるので、結局のところ、短い動詞はいち早く新終止形を固定させていったものと思われる。

○ 助) 下二未 イハレマシキモノニモイハレヌレハ、 (十訓・三)

これは、ことに記すに及ばず。その風情あらはれまじ。

(風姿・巻3)

さやうに言ひたればとて、千筋の繩は許されまじきぞ。

(曾我・巻9)

「まじ」の新しい接続法の未然形接続は、上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞の三つの活用形において現れる。では、なぜ上二段活用と下二段活用においてこのような変化が起きたのであろうか。連体形が終止形を兼ねるようになると、語形において影響を与えられるのは上二段活用と下二段活用であるためである。例えば、四段動詞の場合、「言ふ」は連体形と終止形の形が同じく言ふ>であり、どちらを用いても、形態上代わりがないため、表現する上で何の差し支えもなく、自然に用いることができる。しかし、上二段動詞の場合では、「起く」を例にすると、連体形<起くる>が終止形に用いられるようになり、既存の終止形<起く>とは違う語形となるのである。この変化について橋本(1955)b³⁶では次のような問題について説かれている。まず、音節数が長くなり、次に、既存の終止形接続では見られなかった「る」音ができるようになることである。音節数の増加は新しい響きによるリズムの破壊を招き、各々の品詞における音節数を保とうとする意識を引き起こすよう作用する。それに、動詞の語尾の「る」音は、かつて上代の上一段動詞において脱落を経験しているが、『古今集』における「見る」の例を見ると、「まじ」と同じ接続をしていた「べし」は「見るべし」ではなく、「見べし」と、「る」音のない接続法を用いている。これが、中古に入り、他の活用形との統一性のため「る」音の付いた「見るべし」となるのであるが、ここに「内在」していた性質から再び「る」音を避けるようになったのである。そこで、既存の音節数を保ちながら「る」音を避けるために選ばれるのは「未然形」だけだったのである。このような理由から中世の「まじ」は、上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞に接続する時、未然形に接続する形となったのである。

36) 橋本四郎(1955)b 前掲書 p.56

<表 17 >

作品名	四止	上二止	下二止	ナ止	サ止	助) 四止	助) 下二止
保元物語	4	0	1	0	0	0	0
新古今和歌集	1	0	0	0	0	0	0
平治物語	7	0	2	0	0	0	0
十訓抄	7	1	4	0	4	1	1
沙石集	13	1	0	1	4	0	0
平家物語	41	1	12	0	6	0	1
徒然草	5	0	3	0	1	0	0
曾我物語	28	0	2	1	4	0	1
義経記	87	0	2	0	0	0	1
風姿花伝	8	0	4	0	7	0	0
老のすさみ	3	0	0	0	1	0	0
閑吟集	3	0	0	0	0	0	0
合計	207	3	30	2	27	1	4

○ 四止 但わどのをさぐるにはあらず、存ずるむねがあれば名のまじいぞ。
(平家・巻7)

申ければともになふまじき御きそくなりければ、 (保元・上)

人を付けられて叶ふまじと思召して、 (義・巻2)

よその風体をも、確かにはまして知るまじきなり。されば、能弱くて、
久しく花はあるべからず。 (風姿・巻5)

○ 上二止 いまの都福原の新都へのぼらうに、三日にすぐまじ。
(平家・巻5)

各々一本づつ築き候ふとも、二十日には過ぐまじく候ふ。

- (沙石・巻3)
- 下二止 「高雄の神護寺に庄一所よせられざらん程は、ま(ッ)たく文覚い
づまじ」 (平家・巻5)
- 「…かくのみあらんには、御物まうでな(ン)ども、今は御心にまか
すまじき事やらん」とぞ仰せける。 (平家・巻6)
- 「若ふしぎにも世にあらむときはたづねよ。頼朝も命の中にはわする
まじきぞ。」 (平治・下)
- ナ止 これらは、皆、弓箭に懸りぬれば、ただ死ぬまじき者の死にたるや
うに覚えて、 (曾我・巻10)
- 僧一人、「竜山寺より来れり。死ぬまじきぞ。自害なせそ」と仰せ
られけり。 (沙石・巻2)
- サ止 平家の次男前右大将宗盛卿、すまじき事をし給へり。
(平家・巻4)
- これを上手のせぬは、かなはぬやらん。また、すまじき事にてせぬ
やらん。 (風姿・巻3)
- 「…一寸の首を千段に召され候ふとも、全く恨みとも存ずまじく候ふ
なり」とぞ申しける。 (曾我・巻9)
- 助) 四止 天魔答へ申しケレバ、「礼ムマシ」トノ給へハ、「ユメユメ」ト口
カタメテ、 (十訓・巻1)
- 助) 下二止 小督があらんかぎりは世中よかるまじ。 (平家・巻6)

<表17>は終止形に接続する「まじ」の用例数であるが、全ての上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞において未然形接続を統一していたわけではないことが分かる。活用語の変化につれ、接続法においても変化が起きたとはいえ、それは一瞬で決まった法則に一括されるのではないということの反証であろうと思われる。『保元物語』・『十訓抄』・『曾我物語』・『義経記』・『風姿花伝』には、同じ文献の中から、未然形接続と終止形接続が同時に現れるなど、混載して用いられていたことが分かる。このよう

に、画一に終止形に接続していた中古に比べ、中世は未然形と終止形、両方の接続が混ざっていた時期であったのである。

<表 18 >

作品名	ラ体	助) ラ体
保元物語	3	0
新古今和歌集	0	0
平治物語	0	0
十訓抄	8	1
沙石集	6	2
平家物語	18	3
徒然草	1	0
曾我物語	8	0
義経記	25	0
風姿花伝	23	0
老のすさみ	0	0
閑吟集	0	0
合計	92	6

- ラ体 これこそあるまじき御事にてこそ候へ。 (保元・中)
- 侍従は誠に学生なれども、自利の心にて、人のため益あるまじき者なり。 (沙石・巻5)
- 「先々の目代は不覚でこそいやしまれたれ。当目代は其儀あるまじ。只法に任よ」 (平家・巻1)

- 助) ラ体 力及ばず候ふ。さればとて、給はるまじき所領を、争か給はるべく候ふ。」と申しければ、 (沙石・巻7)
- スヘテ文ハイツモケナルマシキ也。 (十訓・巻7)
- 「くるしかるまじ。われそだてまいらせて、まうけの君にしたてまつらん」 (平家・巻8)
- さる事あるらん。其人ならばくるしかるまじ。 (平家・巻7)

次に、ラ変型活用語の用例数である。ラ変型活用語の場合は、調査したところ例外なく連体形に接続していた結果であった。これについて鈴木(1968)³⁷⁾は、ラ変型活用語の連体形<-る>が終止形<-り>の代わりをするようになるが、形態上四段動詞の終止形<-u>音と同じであったため、抵抗なく受け入れられたのであろうと説明している。

ここまでの調査で、中世における「まじ」の接続は次のようであることが分かる。

- 四段動詞の終止形に接続する。
- 上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞の終止形にも、未然形にも接続する。
- ラ変型活用語の連体形に接続する。

接続は近世に入ると、サ変活用動詞・カ変活用動詞の終止形と未然形、それに四段動詞の未然形にも接続する例があるなど、その揺れがより激しくなる。

3.4 近世

終止形接続を基本としていた中古を経て、接続面に揺れができ、基本の接続法から離れて上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞の終止形・未然形にも接続していた「まじ」であるが、近世に入ると、その揺れが深化する様子を見せるようになる。

37) 鈴木丹士郎(1968)「「べし」と「まじ」の接続—文語史上の一問題として—」『専修大人文学研究所月報6』専修大人文学研究所 p.14

<表 19 >

作品名	未然形	終止形	連体形
好色一代男	7	19	9
好色五人女	3	16	7
好色一代女	3	12	5
去来抄	0	13	2
冥途の飛脚	5	15	6
妹背山婦女庭訓	4	26	12
曾我会稽山	3	6	0
合計	25	66	41

<表19>は用例別の接続の用例数を表した表で、未然形と終止形、連体形に接続することが分かる。中世の接続の用例数では、終止形接続が274例と未然形接続が12例で、終止形接続に対する未然形接続の比率が4:96と、終止形接続の用例数が圧倒的に多かったが、近世では未然形接続と終止形接続が3:7くらいで未然形接続が増えていることが分かる。上接する活用形の詳しい用例数は次の通りである。

<表 20 >

作品名	四未	上二未	下二未	カ未	サ未	助) 下 二未	助) サ 未
好色一代男	2	2	1	0	2	0	0
好色五人女	0	0	2	0	1	0	0
好色一代女	0	0	0	1	2	0	0
去来抄	0	0	0	0	0	0	0
冥途の飛脚	0	0	4	0	1	0	0
妹背山婦女 庭訓	0	1	0	0	0	3	0
曾我会稽山	0	0	1	0	2	0	0
合計	2	3	8	1	8	3	0

*<表21>の終止形接続との比較のため、サ変活用助動詞は用例はないが、そのまま表に表示した。

- をんな赤面して、「よもやただ事とは人々も見まじ」、とくと心をしづめ、御脇ばらな
どをはばかりながらなでさすり、
(一代男・巻1)
- 油断のならぬ世の中に、殊更見せまじき物は、道中の肌付金、酒の酔に脇指、
娘のきはに捨坊主と、
(五人女・巻1)
- なほやめがたく一世の約束して、「見すてな」、「捨てまい」、末は千とせの松
陰に木隠れ、かかる所へ、
(一代男・巻3)
- 詞ア、いかう気が滅入る。わつざりと浄瑠璃にせまいか。
(冥途・中之巻)
- 奉納ありは余人でない。覚えなるとは言はれまい。
(妹背・第一)
- 御心にはしたかひながら、人めせはしき宿なればうまい事はなりがたく、しんいを互に
燃やし、
(五人女・巻1)

<表20>は未然形の活用語に接続する例の用例数であるが、中世とは違って、四段

動詞・カ変活用動詞・サ変活用動詞にまで未然形接続が現れていることが分かる。前節で説明した通り、中世において「終止・連体形の合一」により選ばれた新しい接続法の未然形接続が、上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞のみでなく、四段動詞とカ変活用動詞・サ変活用動詞にまで影響を及ぼし、既存の終止形に接続していた規則を破らせ、他の上接語を未然形接続へと招いた結果であろう。

<表 21 >

作品名	四止	上二止	下二止	カ止	サ止	助) 下二止	助) サ止
好色一代男	8	0	0	0	0	2	0
好色五人女	0	0	0	0	8	1	0
好色一代女	7	0	0	0	0	0	0
去来抄	9	1	0	0	1	0	0
冥途の飛脚	9	0	0	0	0	0	0
妹背山婦女庭訓	13	0	0	0	0	0	1
曾我會稽山	2	0	0	0	4	0	0
合計	48	1	0	0	13	3	1

- 三途川の姥も、これみたらば欲をはなれ、高麗橋の古手屋も、ねうちはなるまじ。
(五人女・巻1)
- この大神楽は作り物にして、手くだのために出しけるとは、かしこき神もしらせ給ふまじ。
(五人女・巻1)
- 曾我を引く御前通路の割符の札、彼等が手に入るまい物でなし。(会稽山・8)

次に、終止形に接続する用例数は上の<表21>の通りである。未然形接続の<表2

0>と比較すると、調査した資料の中では用例が現れていない下二段動詞とカ変活用動詞を除くと、全て未然形と終止形の両方に接続していることが分かる。

<表 22 >

作品名	ラ体
好色一代男	9
好色五人女	7
好色一代女	5
去来抄	2
冥途の飛脚	6
妹背山婦女庭訓	12
曾我会稽山	0
合計	41

- この女がその太夫にてこれ程自由にならば、もつともおもしろかるまじ
(一代男・巻3)
- 詞なに采女様御行方知れずとや、ム、何にもせよ、程はあるまじ。
(妹背・第一)
- なほ年をかさね勤めての後は、かならず悪しかるまじき身を、十一歳の夏はじめより
わけもなく取乱して、
(一代女・巻1)
- こなた、住吉の祭を見さしやつた事があるまい。
(一代女・巻4)

しかし、ラ変活用動詞には前代と同じく連体形に接続している例だけが現れ、変化の影響を受けていないことが分かる。この時期の用例は「あるまい」という表現が多用されてい

たが、この、ある程度固定していた言語表現が、ラ変活用動詞における接続法の維持を支持していた一つの理由になったのではないかと考えられる。

ここまでの近世における接続の様相を整理すると、四段動詞・上二段動詞・下二段動詞・カ変活用動詞の未然形、四段動詞・上二段動詞・下二段動詞・サ変活用動詞の終止形、ラ変活用動詞の連体形に接続していることである。

一方、この接続の揺れについて湯沢(1954)³⁸⁾は、地方によっても接続の差が現れていたことを述べている。特に、サ変活用動詞における接続が、「せまい」「すまい」「しまい」など、ほぼ全ての活用形にかけて用いられるようになる。これは現代語で「まい」に上接するサ変活用動詞「する」が、なぜ様々な活用形で用いられているかを教えてくれる手がかりであると言えよう。

近世の接続は、次のようにまとめられる。

- 四段動詞・上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞・カ変活用動詞・サ変活用動詞の終止形にも、未然形にも接続する。
- ラ変型活用語の連体形に接続する。

3.5 副読本の考察

38) 湯沢幸吉郎(1954)『江戸言葉の研究』明治書院 p.478

この時期の江戸語を中心に、「せまい」「しまい」という表現が併用され、「すまい」はあまり行われなかった。またこれは、一つの文の中に二種の言い方が現れるなど、固定していない様子がうかがえる。

<表 23 >

	活用語	ラ変	形容詞・ 形容動詞活用
①	終止形	連体形	
②	”	”	連体形
③	”	”	
④	”	”	
⑤	”	”	
⑥	”	”	
⑦	”	”	
⑧	”	”	
⑨	”	”	
⑩	”	”	
⑪	”	”	
⑫	”	”	連体形
⑬	”	”	

<表23>は、2章に挙げた<表8>の副読本による接続の分類である。13の副読本全部、例外なく活用語の終止形とラ変型活用語の連体形に接続すると分類している。②と⑫だけが形容詞と形容動詞活用の接続について言及しているが、形容詞と形容動詞活用に接続するためには「-かり」を介入せねばならず、ラ変活用と見做しても差し支えがなかろうと考えられる。3.3節の調査によると、中世以降の用例から未然形接続が現れるものの、これは「まじい」「まい」と語形の分化を伴っており、「まじ」の教育の面では、その代表する接続法を提案した方が、学習者の理解に役立つと思われる。そこで、次のよう

に説明することが穏当であろうと考えるのである。

-活用語の終止形に接続する。

-ラ変型活用語の連体形に接続する。

4. 意味の研究

4.1 上代

上代における「ましじ」は、その例数に乏しく、多く、「得（う）」「敢（あ）ふ」「かつ（補助動詞）」「ゆ（助動詞）」など、いくつかの可能の意味を表す語に下接して用いられる用例が多い。

- 菟怒瑳破赴以破能臂謎餮朋呂伽珥枳許瑳怒于羅遇破能紀予屢麻志枳箇破能区莽愚莽予呂朋譬喻玖伽茂于羅愚破能紀 (書紀・卷11)
- 保里延故要等保伎佐刀麻弓於久利家流伎美我許己呂波和須良由麻之目 (万・4482)
- 王等波己我得麻之岐帝乃尊岐宝位乎望求米 (続紀・卷30)
- 阿良多麻能伎倍乃波也之爾奈乎多弓天由伎可都麻思自移乎佐伎太多尼 (万・3353)
- 近くあれば見ねどもあるをいや遠に君がいまさばありかつましじ (万・610)
- 我が大君神の尊の高知らす布当の宮は百木茂り山は木高し落ち激つ瀬の音も清しうぐひすの来鳴く春へは巖には山下光り錦なす花咲きををりき雄鹿の妻呼ぶ秋は天霧らふしぐれを疾みさにつらふ黄葉散りつつ八千年に生れつかしつ天の下知らしめさむと百代にも 変はるましじき大宮所 (万・1053)
- 布当山山並見れば百代にも変はるましじき大宮所 (万・1055)
- 大野らにたどきも知らず標結ひてありかつましじ我が恋ふらくは (万・2481)
- 堀江越え遠き里まで送り来る君が心は忘らゆましじ (万・4482)

上の用例のように、可能の意味を表す表現と「ましじ」が用いられており、また、意味の面でも「べし」の否定語の位置にあった³⁹⁾ことを根拠として、

- (A) 当然・必然・断定・推定・可能
- (B) 慫慂・命令(伝義)
- (C) 決意(伝義)

のような上代の「べし」の意味用法⁴⁰⁾の中 (A) に対応しており、「ましじ」は後代のように推量の意味を持っているとは、まだ確言できないという説がある⁴¹⁾が、これは共起する単語に集中しすぎて「ましじ」の本義から離れた解釈ではないかと思われる。

「べし」も「ましじ」も推量の意味を基本として第二、第三の意味が派生されるわけで、可能を表す文の中によく用いられるから可能の意味があるという主張には従えないところがある。

- 百代爾母不可易大宮処 (万・1053)
- 布当山山並見者百代爾毛不可易大宮処 (万・1055)

また、この用例の「不可易」の部分で、『日本古典文学大系』『万葉集全注』『新編日本古典文学全集』では「変るはずもない」と、『新潮日本古典集成』『万葉集釈注』では「変ることなどあるはずもない」、『評釈万葉集』『万葉集私注』『日本古典文学全集』では「易りそうにない」と解釈しているが、「ましじ」が「べし」の否定語であるところからも漠然たる推量の意味を加えるのは無理のようである。「～そうにない」と解釈するのは、後世の意味用法であり、この時期の「ましじ」を解釈するためには、可能の意味を表す文によく用いられたことと、「べし」の反対語で

39) 塚原鉄雄(1957)「推量の助動詞—その国語史的考察」『国語国文26』星野書店 p.142

<ましじ>は<べし>に相当する否定表現としての意味を持っていると述べている。

40) 大野透(1956) 前掲書 p.82

41) 後藤和彦(1969) 前掲書 p.31

「ましじ」は文献資料に依る限り、可能表現の中で用いられることが多く、可能の意を表す語とよく接続することによって、その可能の意味が「ましじ」に内包されるようになった。

あったことを考慮して、可能性と事態の必然性に基づいた「～はずがない」といった解釈が正しいと判断される。

後の中古文献には「え…まじ」の形態が現れるようになるが、それはこのような可能の意味を内在し、また、その意味を継承している例であると推定できる。

4.2 中古

中古は「まじ」の全盛期とも言える時期であり、用例に富んでいる。そこから、意味においても多様な語彙と相まって豊富な表現がなされている。まず、実際の用例を見ることにする。

- 打消の推量 …ないだろう …まい

「ここにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、えいでおはしますまじ」と申せば、

(竹取・巻22)

雀などのやうに常にある鳥ならば、さもおぼゆまじ。

(枕・39段)

- 打消の意志 …ないつもりだ …まい

「この幼き者はこはくはべる者にて、対面すまじき」と申す。

(竹取・巻16)

おとなしくみなしてはほかへもさらにいくまし

(源氏・紅葉賀)

- 打消の当然 …するはずがない …すべきではない

かかるおりにもあるましき恥もこそと心遣ひして

(源氏・桐壺)

ほとけの御しるへはくらきにいりてもさらにたかうましかなるものを

(源氏・若紫)

- 不可能 …できそうにない

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、

(伊勢・巻6)

昔、男、思ひかけたる女の、え得まじうなりての世に、

(伊勢・巻55)

- 不適當 …ない方がいい

かくて京へ行くに、島坂にて、人、響応したり。必ずしも有るまじきわざなり。

(土佐・巻5)

○ 禁止 …してはならない

いまはさはおほとこのもるましきそよとをしへきこえ給へは

(源氏・若紫)

先学者による意味分別に合わせて、各々の用例を採ってみると上のようになる。では、この分別は従うべきであろうか。「まじ」の意味を中田(1963)⁴²⁾は、周囲の種々の情勢、様々の客観的理由から、「どうしてもそうなりそうだ。」「そうならなくてはならない。」であると説明している。また山田(1929)⁴³⁾は、「まじ」の意味を、「否定的に現実を推量す」と言い、土井(1968)⁴⁴⁾は、「未確定の事実を否定するのではなく、「ずあらむ・ざらむ・ずあるべし・ざるべし」と等価値なのであって、ある事態の実現を推量するという思考過程を経て成立する」と説明している。このようなことから、「まじ」は、ある程度の根拠に基づいて推量する意味を持つということが分かる。

このことについて、全ての用例を挙げて説明するのは無理のように思われるが、「打消の推量」は、その量において大多数を占めており、「まじ」の基本的な意味であると見ることには差し支えがないようである。これは、非事実に対して漠然に「そうであろう」と推測するのではなく⁴⁵⁾、根拠に基づいて客観的に推量する意味である。次に、「打消の意志」も、ある事柄の実現しないことを、事実の根拠に基づいて、「そうはしないつもりだ」という強い意志を表す意味になる。

ここまでは、ある程度一致した分類が提案されているようであるが、三番目の理由からは次の4.5節の副読本でも、様々な意見がある。『古典語現代語助詞助動詞詳説』⁴⁶⁾ではこのような詳しい分類に反対し、不可能と打消の当然の意味はそれぞれ、

42) 中田祝夫(1963)「解釈文法雑筆(3)―「べし」と「まじ」およびその「裏」と「表」(その二)」『国文学言語と文芸30』明治書院 p.66

43) 山田孝雄(1929)『日本文法論』大阪宝文館 p.447

44) 土井洋一(1968)「否定(ず・ざり・じ・まじ)」『国文学解釈と鑑賞33』至文堂 p.103

45) 塚原鉄雄(1957)「推量の助動詞―その国語史的考察」『国語国文26』星野書店 p.141

46) 松村明(1969) 前掲書 p.236

打消の推量と禁止に属する意味であると言い、打消の推量・打消の意志・禁止だけを認めている。しかし、前節の上代の例で挙げたように、「え…まじ」に潜んでいる可能の意を推量に一括するのは無理のようであるし、打消の当然の意味を禁止に含めるのはむしろ逆になった方が納得できるようである。「まじ」が根拠に基づいた表現であるとは言え、まだ実現しない事柄への推量の意を基本としている限り、相手に対してその実現することを阻止するほどの強さは認めがたいのである。そこで、禁止は「…するはずがない」「…すべきではない」といった打消の当然に編入させた方が穏当であると思う。

4.3 中世

中世の「まじ」「まじい」「まい」の意味は、活用と接続の変化から、その表現性にも混乱ができ、意味の面でも縮小されるようになるのである。

まず、小林(1977)^{a47)}は鎌倉期の「まじ」の表現内容を「否定推量」「否定意志」「禁止・不適當」の三種の意味で説明している。また、湯沢(1929)⁴⁸⁾は室町期の「まじい」と「まい」の意味を次の三つに述べている。

- 打消と推量との意を兼ね表す。
- 打消と意志・決意を兼ねた意を表す。
- 打消と事の当然なる意、または適當なる意とを兼ね表す。(一転して、不可・禁止の意)

上の説明に属する用例は次のようである。

○ 打消の推量 …ないだろう …まい

47) 小林賢次(1977)a「院政・鎌倉時代におけるジ・マジ・ベカラス」『国文学言語と文芸84』明治書院 p.119

48) 湯沢幸吉郎(1929)『室町時代の言語研究』大岡山書店 p.212

唐の物は、薬の外はなくとも事かくまじ。(徒・120段)

「この勢一所にてはかなふまじ。いとまとらすぞ。東国にまいりあふべし。」との給へば、(平治・中)

二度都へまいるまじきよし人々にも申をいたり。大臣殿へも此やうを申あげて候ぞ」といひければ、(平家・巻7)

「夜うちにこそさりともとおもひつれども、ひるいくさにはかなふまじ。あれよびかへせや」(平家・巻4)

○ 打消の意志 …ないつもりだ …まい

わが身は女なりとも、かたきの手にはかゝるまじ。(平家・巻11)

此手は、悪所をおとさんずる時に、誰さきといふ事もあるまじ。(平家・巻9)

○ 不適當 …ない方がいい

妻といふ物こそ、をのこの持まじき物なれ。(徒・190段)

ひとへにむさぼる事をつとめて、菩提にをもむかざらんは、万の畜類にかはる所有まじくや。(徒・段59)

小林(1977)b⁴⁹⁾は鎌倉の「まじ」の用例を調査し、「打消の推量」の意味が圧倒的に多いことを確認している。調査した文献資料の用例数から確認しても、「打消の推量」の意味を持つ「まじ」の用例が他より多いのである。中古において「不可能」の意を表していた意味内容は、中世になると認めることに疑いが生じる。湯沢(1929)⁵⁰⁾の言う通り、転じた意味からは解釈できる用例もあるようであるが、調査したところでは、それを「まじ」の意味と認めがたいのである。中世には多様な新しい助動詞が発達され、いくつかの意味を内在していた「まじ」に託せず、各々の明確な意味を持つ助動詞を用いて表現するようになったためであろう。

一方、上村(1973)⁵¹⁾は室町期の「まじい」と「まい」の意味の相違点を把握するた

49) 小林賢次(1977)b「院政・鎌倉時代における否定推量・否定意志の表現—ジ・マジ・ベカラズの周辺—」『香川大教育学部研究報告43』香川大学教育学部 p.70

50) 湯沢幸吉郎(1929) 前掲書 p.212

51) 上村良作(1973) 前掲書 p.372

め、『平家物語』の異本の比較に触れている。13～14世紀の鎌倉時代に書かれた『大系本平家物語』における「まじ」「まじい」「まい」の用例が、1592年刊行された『天草版平家物語』にはどのような表現で置換されているかを調査し、「まじ」「まじい」「まい」がどのような意味を表しているかを説明している。上村(1973)は、室町時代を「まじい」と「まい」が併存した時代であるとみて、両語の勢力はほぼ同等であったと述べている。「まじい」は直裁的表現を意味内容として言い換えられたものが比較的多いのに対して、「まい」は「べし」以外にも「む」「らむ」など、推量の打消否定表現を意味内容として言い換えられたものが多いのである。このことから意味内容において「まい」の領域が拡張しつつあることが考えられよう。また、山口(2000)⁵²⁾も、「まい」と「まじ」「まじい」の意味の相違あることを指摘している。両語の意味の差が、「まい」を後代にまで残し、言語としての生命力を保たせた役割を果たしたとしている。新語形であった「まい」の意味が前代の「まじ」や「まじ」の音便形から発生した「まじい」と全く一致していたとしたら、「まい」は後代まで生き残る価値がなくなるのであり、室町期の「まい」の意味の領域の拡張が、「まい」の勢力を保たせたという説明にはうなずけよう。

4.4 近世

近世における、言わば「まじ」系の表現は、2.4節で考察した通り、「まじ」は主に文語に用いられ、一般口語では「まい」が多用されるようになる。⁵³⁾ 巖(2006)⁵⁴⁾の「会話文と地の文で現れている「まい」の用例数」の調査によると、「まい」は会話文に用いられる例が圧倒的に多く、地の文にはあまり現れないのである。これは、主に

52) 山口堯二(2000)「『天草版平家物語』の「まじい」と「まい」—原文との対照から見た打消推量の助動詞統合の歩み—」『京都語文5』仏教大学国語国文学会 p.187

53) 湯沢幸吉郎(1936) 前掲書 p.413

54) 巖畢嬌(2006)「近世後期から明治期にいたる「まい」の発達について」『日語日文学32』大韓日語日文学会 p.5

文語を中心に調査を行った2.4節の〈表6〉とは反対の数値を表しているのである。このような数値の差違は、近世において「まじ」は文語的性格に固定していることで、一般口語では「まい」が多用されていたということの反証であろう。このような理由から、近世の意味については、口語資料における「まい」の意味を中心に考察を行いたいのである。

近世には今までなかった多様な助動詞が発生し、いくつかの意味を表していた「まじ」系の領域は不安になっていった。それに、「まじ」は今まで考察してきたよう、活用面でも接続面でも衰退しつつあり、このような理由から意味の面においてその意味内容が縮小され、助動詞としての力さえ弱まっていくようになる。また、山口(2001)⁵⁵⁾は「だろう」「でせう」などの言い方との併用により、「まじ」における打消推量の意味は薄くなる、また、禁止の意味は衰退して本来の性格を失いつつあると述べている。

【打消の推量】

- 知らぬ振りしては居られまい (好色博受・上) ア⁵⁶⁾
- いつの何時かたきに逢ふまいものでもない・勝負は時の運、若し返討にあふまいものでもない (元・473) ア
- 私の様な者にだまされる者もありますまい (花筐・12) イ
- なんだね、おかしもない、娘子供おじゃあるまいし、心意気なんぞはいやだはね (娘節用・5) イ
- ナンノお前様、他人おじゃ在んなさるまいし、誠にお堅いことばかり被仰いますネへ (若緑・1) イ
- おれに読めねへから誰にも読めまい (浮世・84) ウ
- お暑さのお凌はお大体様ではござりますまい (浮世・290) ウ

55)山口堯二(2001)「『まい』の通時的変化」『文学部論集85』仏教大学文学部 p.41

56) 近世の口語資料における用例は次によるものである。

ア：湯沢幸吉郎(1929)『室町時代の言語研究』大岡山書店

イ：湯沢幸吉郎(1954)『江戸言葉の研究』明治書院

ウ：巖畢嬌(2006)「近世後期から明治期にいたる『まい』の発達について」『日語日文学32』大韓日語日文学会

- 実母散や婦王散も、おまへさんがお子もちだけに、御如在はございますまい

(浮世・120) ウ

用例数において「打消の推量」は圧倒的に多いとされ、中古と中世を経て多様な意味に分化した意味内容が消滅していくことが分かる。また、「まい」は「し」を下接する用法があり、相手に対する話し手の判断や軽い忠告の意味を表す。

【打消の意志】

- いひかはしたる詞の末たがへまい (新・349) ア
- 笑ふまいと思っても、ふき出してならねへ (浮世床・2) イ
- 屋しきの案内を世間へ知らせまいと… (いろは・4) イ
- 孝助は自分の部屋へ帰り、最う是までと、思ひ詰め、姦夫姦婦を殺すより外に手段はないと忠心一途に思ひ込み、夫れに就いてはたとひ己は死んでも此御邸を出まい。
(牡丹・20) ウ
- 我が子ならば雪の中を裸足では歩かせまい。(浮世・257) ウ

「まい」が「打消の意志」の意味で用いられる場合は、「打消の推量」の用例に比べ、「まい」に上接する動詞が様々であることが分かる。これは、「意志」を表す表現の特性上、話し手の発話に自由度が高く、その分、用例は少ないものの、表現性においては豊富であるためであろう。

【禁止】

- これ與兵衛さま、うろたへまひ、いひわけをなされ (紅葉・36) ア
- ヲット隠居、みなまでいふまい (若緑・18) イ
- 寒助のけなげな心ざしに恥ちても未練な涙をこぼすまいぞ (いろは・68) イ
- 母「そふさ、池上町の角屋は堅いといふ評判だから、あれへ参り宿を取ておいで、九ツの鐘を忘れまいぞ。

孝「決して忘れません。左やうならば。

(牡丹・下)ウ

近世口語における「まい」は、用例から分かるよう、文中にはあまり用いられず、主に文末に用いられており、いわば「文末表現」のようでもある。これは、意味を補う助動詞的性質を失っているとも言えよう。

この「まい」は、疑問を表す終助詞「か」を下接して、疑問および相手に強く主張する確認的用法になるなど、決まった表現で用いられるようになる例が多数みられる。

[まいか]

○ ハルどうぞ思案はあるまいかと言へば、勘十郎色うなづいて。 (五十・巻13)

○ 「太夫は居ずともむまいか」と、真柴折りくべ焼味噌をかしく、

(一代男・巻7)

これがますます縮小の道を歩き、打消推量の意味と打消意志の意味だけが残り、現代に至ると否定的推量の意味と否定的意志の二つの意味を持つようになるが、助動詞「う・よう」の発達により口語では使われなくなりつつある。

4.5 副読本の考察

まず、副読本の説明をまとめることにする。

<表 24 >

①	打消の推量	打消の意志	打消の当然 (禁止)	不可能	打消の勧誘 (不適當)
②	打消の推量	打消の意志	打消の当然	不適當	不可能
③	打消の推量	打消の意志	打消の当然		
④	打消の推量	打消の意志	打消の当然 (不適當)	不可能	禁止
⑤	打消推量	打消意志	打消当然	打消可能	禁止
⑥	打消の推量	打消の当然	打消の意志	不適當 ・禁止	不可能
⑦	打消推量	打消意志	不可能	打消当然	不適當 ・禁止
⑧	打消の推量	打消の意志	不適當・打 消の当然	不可能	禁止
⑨	打消の推量	打消の意志	打消の当然 ・不適當	不可能	禁止
⑩	打消推量	打消意志	打消当然	不適當 ・禁止	不可能推量
⑪	現実に存在していない事からを、実現するはずがないと否定して予想する意味を表す。(ハズガナイ。ナイツモリダ) 助動詞「べし」の打消で、俗語的であった。				
⑫	推量 (打消)	意志 (打消)	当然 (打消)	禁止	
⑬	打消の当然 ・推量	不可能	不適當	打消の命令 (禁止)	打消の意志

主に五つの意味に分けて説明されているが、これを意味の順に再度整理すると次のよ

うになる。

<表 25 >

㉑	打消の推量	打消の意志	打消の当然 (禁止)	不可能	打消の勧誘 (不適當)
㉒	打消の推量	打消の意志	打消の当然 (不適當)	不可能	禁止
㉓	打消の推量	打消の意志	打消の当然	不適當	不可能
㉔	推量 (打消)	意志 (打消)	打消の当然		
㉕	打消の推量	打消の意志	当然 (打消)	禁止	
㉖	打消推量	打消意志	不可能	打消当然	不適當・禁 止
㉗	打消の推量	打消の当然	打消の意志	不適當 ・禁止	不可能
㉘	打消の当然 ・推量	不可能	不適當	打消の命令 (禁止)	打消の意志

㉑は①、㉒は④⑤⑧⑨、㉓は②⑩、㉔は③、㉕は⑫、㉖は⑦、㉗は⑥、㉘は⑬の分類であり、⑪は他の副読本のような分類がないため省くことにした。上の表から見ると、㉘で打消の当然を加えていることを除くと、どちらも打消の推量を第一の意味として挙げていることが分かる。二番目の意味としては㉑から㉖までに属する副読本で、打消意志の意味を挙げており、㉑から㉕までの副読本で打消の当然を表す意味をその次に置いている。この三つの意味以外には順番の差はあるものの、不可能、不適當、禁止、打消の命令などの意味があると説明されている。この意味の分類によると、「まじ」の意味の中心は「打消の推量」にあると解釈できる。

4.2節と4.3節の考察を参考に、「まじ」の意味を「打消の推量」「打消の意志」「打消の当然」の順で理解するのは、十分納得できると思う。次の分類が問題となるのであるが、これは、中世に至り、意味が薄くなったところの影響ではないかと思われる。上に挙げた三つの意味に編入された意味もあれば、その派生的に解釈すべき用例もあるため、このように意味の使い分けに異論が生じるのであろう。そこで、副読本の分類と4章の中古と中世における意味の考察をまとめ、次のような意味分類を提案したい。

- 打消の推量 …ないだろう …まい
- 打消の意志 …ないつもりだ …まい
- 打消の当然(禁止) …するはずがない …すべきではない
- 不可能 …できそうにない
- 不適當 …ない方がいい

Ⅲ. おわりに

本論文では打消推量の助動詞「まじ」の上代から近世に至るまでの変化の流れを通時的な観点から語源をはじめ、活用、接続、意味に分けて検討した。まず、「まじ」と代表する「まじ」系の時代別語形は、次のごとくである。

- 上代：「ましじ」
- 中古：「まじ」
- 中世：「まじ」「まじい」「まい」
- 近世：「まじ」「まい」「まじい」

ここまでの検討をまとめると、次のようになる。

(1) 「まじ」の語源

「まじ」の語源は、「べし」の語源「うべ」の古形である「うま」に形容詞接尾辞「し」が付き、また、原始的否定辞「じ」が直結して、「うましじ」が発生した。その「うましじ」の「う」音が上接する活用語の語尾の「-u」音の影響で脱落し、上代における「まじ」系の最初とも言える「ましじ」が発生するようになる。⁵⁷⁾⁵⁸⁾

「ましじ」は上代の文献に現れるだけで、それ以後は全く用例がない。上代は「ましじ」専用の時代であることが分かる。この「ましじ」は3音節という、当時としては長いと認識される助動詞であり、縮小の圧迫に迫られていたようで、類似している「し」音と「じ」音が縮まり、中古の「まじ」となる。

57) 山崎馨(1964) 前掲書 p.59

58) 大野透(1956) 前掲書 p.86

(2) 「まじ」の時代別活用

「まじ」の時代別活用を表でまとめると、次の〈表26〉のようになる。

〈表 26 〉

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
上代	○	(まじみ)	まじ	まじき	○
中古	まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ
中世	○ まじから	まじく まじかり	まじ まじい まい	まじき まじい まい まじかる	まじけれ
近世	○	○	まじ まい まじい	まじき まい	○

上代の「まじ」は終止形と連体形の限定している活用を見せ、連用形においては、連用形接尾辞「み」を下接した形だけがある。⁵⁹⁾この連用形は活用形と見做し得るほどの説得力に乏しいと判断し、上代の連用形は「み」の結合した「まじみ」を括弧付けで表記したのである。

中古の「まじ」は全ての活用形を有しており、その用例も豊富で、自由に使われていた。この中、未然形〈まじく〉を認められるかという問題があるが、同じく形容詞型活用をする助動詞「ず」と「べし」との場合を合わせて考察した結果、未然形に助詞

59) 橋本進吉(1951)a 前掲書 p.116

「は」を下接した「ずは」「べくは」「まじくは」などは、文脈上假定条件を表す用例と連用修飾を表す用例が両方とも登場し、假定条件に解すべき用例があることから、この「は」は接続助詞の役割を果たしている助詞であって、中古における未然形<まじく>は活用形の一つとして認めた方が穏当であることを確認した。

中世には「終止・連体形の合一」という、言語環境における大きな現象に伴い、連体形<まじき>が終止形<まじ>の領域を犯し⁶⁰⁾、「まじき」の音便形の「まじい」が終止形にも用いられるようになる。3音節の「まじい」は、音節の縮小を要求され、「まい」という語形が現れるようになる。この「まい」もまた、「まじい」のごとく、終止形と連体形の両方に用いられ、中世には、終止形と連体形において「まじ」「まじい」「まい」の3種が共存するようになる。

近世に入ると、「まじ」をはじめ、「まじい」と「まい」と言った、言わば「まじ」系が共に勢力を漸次失っていくようになる。この時期になると、「まい」が一般口語に用いられ、「まじ」は主に文語に用いられるようになり、⁶¹⁾中世において「まじ」の新語形として現れた「まじい」は用例が少なく、あまり見られない。一方、活用においては終止形と連体形に用いられるのみで、両方の活用形にも相違がなくなる。この時期から「まじ」は無変化助動詞への道に入っていく姿がうかがえる。

(3) 「まじ」の時代別接続

「まじ」の接続を時代別に表すと次のようになる。

- 上代：活用語の終止形、ラ変型活用語の連体形に付く。
- 中古：活用語の終止形、ラ変型活用語の連体形に付く。
- 中世：活用語の終止形、ラ変型活用語の連体形に付く。但し、上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞の未然形に付くこともまる。

60) 大塚光信(1962) 前掲書 p.64

61) 湯沢幸吉郎(1936) 前掲書 p.413

- 近世：活用語の終止形、ラ変型活用語の連体形、上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞の未然形に付くことを基本とするが、全ての活用語において未然形に付くこともある。

活用語の終止形、ラ変型活用語の連体形に付く接続を基本とする「まじ」は、中世から接続面においても変化が現れる。これは、「終止・連体形の合一」が「まじ」の形態と活用に影響を与えたように、上接する活用語にも影響を与えた結果である。動詞の連体形が終止形の領域を犯し、その中、上二段動詞・下二段動詞・下二段助動詞の場合、既存になかった「る」音が終止形に用いられるようになる。これは音節数が増加することになり、リズムの破壊を招くことになる。また、「る」音を避けようとする上代からの認識が内在し、そこで選ばれたのが「未然形」なのである。上二段・下二段以外の活用語は、「まじ」に上接する終止形と連体形の語形が同じく、変化を要求されなかったため、接続面における変化は部分的に行われたのである。

この接続面の混乱は、近世になると、固定していた活用形にまで影響を及ぼし、四段動詞・サ変活用動詞・カ変活用動詞の接続にも揺れを招くようになる。この揺れの跡は特にサ変活用動詞に目立ち、「せまい」「しょまい」など、地方ごとの訛にその痕跡を残している。⁶²⁾

(4) 「まじ」の時代別意味

「まじ」の時代別意味は、次のごとくである。

- 上代
打消の推量 …はずがない
- 中古

62) 湯沢幸吉郎(1954) 前掲書 p.478

打消の推量 …ないだろう …まい
打消の意志 …ないつもりだ …まい
打消の当然(禁止) …するはずがない …すべきではない
不可能 …できそうにない
不適當 …ない方がいい

- 中世

打消の推量 …ないだろう …まい
打消の意志 …ないつもりだ …まい
打消の当然(禁止) …するはずがない …すべきではない

- 近世

打消の推量 …ないだろう …まい
打消の意志 …ないつもりだ …まい
禁止 …すべきではない

可能の意を持つ語彙とよく用いられ、不可能の意を内在していた上代の「ましじ」は、中古において「打消」の多様な意味を表す語と発達する。これが中世になると、新しい助動詞の登場に伴い、「まし」は転義の意味内容は奪われるようになり、その意味が縮小していく。近世になると、活用・接続面の衰退と同時に、意味においても「打消の推量」と「打消の意志」、そして現代にはなくなった「禁止」の意味を残すようになる。これが漸次衰退し、現代の「まい」にまでつながり、否定的推量と否定的意志の二つの意味だけを残すようになる。

(5)教育への提案

今までの考察を踏まえて、本論文で提案する古典文法教育における「まし」の内容をまとめると次のようになる。

《活用》

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ

各副読本において、未然形<まじく>の存在を認めるかの問題で意見が分けられているが、上記した形容詞型活用をする助動詞「ず」「べし」に加えて、「まほし」「たし」「ごとし」の用例を観察したところ、<-く>に下接する助詞「は」は接続助詞の役割を果たしており、内容面でも仮定条件であることを確認できた。そこで本稿では、「まじ」を教育する際、未然形<まじく>を含めた方が学習者の理解により役立つと考える。

《接続》

- 活用語の終止形に接続する。
- ラ変型活用語の連体形に接続する。

「まじ」の接続を教育するための内容に、中世における様々な揺れまで考慮に入れると、「まじ」の接続を簡明に説明することはかなり難しくなると思われる。また、学習者の理解のためにも、古典文法という教育の本意にふさわしい時代内の用例からして、「まじ」の接続はこの二つであると説明し、他の形容詞型活用をする助動詞との共通点を学ばせるとよからう。

《意味》

- 打消の推量 …ないだろう …まい

- 打消の意志 …ないつもりだ …まい
- 打消の当然(禁止) …するはずがない …すべきではない
- 不可能 …できそうにない
- 不適當 …ない方がいい

多くの副読本において「打消の推量」を第一の意味として提案している。これは、用例数からも、「まじ」の持っている、ある根拠に基づいて推測するという点⁶³⁾からも、「まじ」を代表する意味として提示できる。また、一つの語彙が多様な意味内容を内在して用いられていた古典語の特性を教育するため、上記の順番で説明すると、その派生の過程を理解するにも役立つことができようとする期待するのである。

以上、「まじ」について通時的な観点から、活用・接続・意味において、「まじ」の変化の流れを統括した考察を行った。しかし、上代から長年に渡って用いられた「まじ」の変遷を究明するためには、反対語である「べし」との関係をはじめ、他の推量の助動詞との関係、また、口語と文語における相違点などを含めた総合的な考察を行う必要があり、まだ残された課題は多い。小論をその出発点としつつ、以上のようなことは今後の課題として研究を進めていきたいと思う。

63) 塚原鉄雄(1957) 前掲書 p.141

参考文献

[単行本]

- 国語調査委員会(1917)『口語法別記』国定教科書共同販売所
坪井美樹(2001)『日本語活用体系の変遷』笠間書院
松村明(1969)『(古典語現代語)古典語現代語助詞助動詞詳説』学灯社
山田孝雄(1929)『日本文法論』大阪宝文館
———(1952)『平安朝文法史』宝文館出版
———(1954)『奈良朝文法史』宝文館
湯沢幸吉郎(1929)『室町時代の言語研究』大岡山書店
———(1936)『徳川時代言語の研究』風間書房
———(1954)『江戸言葉の研究』明治書院
———(1959)『文語文法詳説』右文書院

[論文類]

- 上村良作(1973)「天草版平家物語における〈まじい〉〈まい〉について」『今泉博士古希記念国語学論叢』桜楓社
大塚光信(1960)「ベシとマイ」『国語国文29』星野書店
———(1962)「助動詞マイの成立について」『国語学50号』武蔵野書院
大野透(1956)「ベシ・ベカラズ・マシジ・マジについて」『国語学25』武蔵野書院
小路一光(1980)「四否定推量まじ」『万葉集助動詞の研究』明治書院
後藤和彦(1969)「〈まじ〉から〈まじ〉への推移」『万葉70』万葉学会

- 小林賢次(1977)a 「院政・鎌倉時代におけるシ・マジ・ベカラズ」 『国文学言語と文芸84』 明治書院
- (1977)b 「院政・鎌倉時代における否定推量・否定意志の表現—ジ・マジ・ベカラズの周辺—」 『香川大教育学部研究報告43』 香川大学教育学部
- 鈴木丹士郎(1968) 「「べし」と「まじ」の接続—文語史上の一問題として—」 『専修大人文学研究所月報6』 専修大人文学研究所
- 塚原鉄雄(1957) 「推量の助動詞—その国語史的考察」 『国語国文26』 星野書店
- 土井忠生(1933) 「近古の国語」 『国語科学講座5』 明治書院
- 土井洋一(1968) 「否定（ず・ざり・じ・まじ）」 『国文学解釈と鑑賞33』 至文堂
- 中田祝夫(1963) 「解釈文法雑筆(3)—「べし」と「まじ」およびその「裏」と「表」(その二)」 『国文学言語と文芸30』 明治書院
- 橋本四郎(1955)a 「上代の形容詞語尾ジについて」 『万葉15』 万葉学会
- (1955)b 「ベシ・マジの接続面の混乱」 『国語学22』 武蔵野書院
- 橋本進吉(1951)a 「万葉時代の『まじ』」 『橋本進吉博士著作集5』 岩波書店
- (1951)b 「奈良朝語法研究の中から」 『上代語の研究』 岩波書店
- 浜田敦(1955) 「助動詞」 『万葉集大成6』 平凡社
- 日野資純(1964) 「「ましじ」の研究史における「山口栞(やまぐちのしおり)」の位置」 『人文論集15』 早稲田大学法学会
- 福島邦道(1959) 「七、『べし』の研究」 『国文学解釈と教材の研究4・2』 学灯社
- 山内洋一郎(2003) 「4.連体形終止の関連語法—3.終止・連体形と助動詞「ベシ・マジ—現代語「マイ」の接続不整の源—」 『活用と活用形の通時的的研究』 清文堂出版

- 山口堯二(2000)「『天草版平家物語』の「まじい」と「まい」—原文との対照から見た打消推量の助動詞統合の歩み—」『京都語文5』 仏教大学
国語国文学会
- (2001)「「まい」の通時的変化」『文学部論集85』 仏教大学文学部
- 山崎馨(1964)「形容詞系助動詞の成立—その一、まし・ましじ・き—」『国語と国
文学41』 明治書院
- 山田孝雄(1957)「まじ、べし」『国文学解釈と鑑賞33』 至文堂
- 金沅基(2003)「「ずは」の意味と文法的解釈—『万葉集』の用例を中心として—」『日本学報54』 韓国日本学会
- 嚴畢嬌(2006)「近世後期から明治期にいたる「まい」の発達について」『日語日
文学32』 大韓日語日文学会

[副読本]

- 秋本守英・渡辺輝道(1998)『新・古典の文法』 中央図書
- 岩淵悦太郎(1990)『文語の文法』 秀雄出版
- 北原保雄(1998)『古典にいざなう新古典文法』 大修館書店
- 小島昌光(1999)『<基礎から解釈へ> 新しい古典文法』 桐原書店
- 坂倉篤義・堀口和吉(1981)『新修文語文法』 京都書房
- 桜井光昭(1996)『<活用>古典文法』 桐原書店
- 田辺正男(1998)『新訂古典文法』 大修館書店
- 塚原鉄雄(1988)『新講古典文法』 親展社
- 築島裕(1999)『精選古典文法改訂版』 明治書院
- 中村幸弘・宮原俊二(1993)『文語文法マスター』 日駿刊
- 松村明・坂梨隆三(1999)『チェックシートわかりやすい古典文法改訂版』 明治書院

松廷市次(1998)『基礎の古典文法』桐原書店

馬淵和夫(1995)『<詳解>古典文法〔改訂版〕』桐原書店

ABSTRACT

A Diachronic Study of Negative Conjecture Auxiliary Verb 'maji'

KIM, JI HYUN

Department of Japanese

Language and Literature

Graduate School of

Sungshin Women's University

The negative conjecture auxiliary verb *maji* first appears as *masiji* in the ancient ages literature, leading to *maji* in the medieval ages, and differentiates into *maji*, *majii*, and *mai* in the middle ages. Later, in the early modern ages, the influence of *majii* was weakened and *maji* was mainly used for written language and in modern ages, it was settled as *mai*, an unchanging auxiliary verb.

The process of *maji*'s transformation has been studied by many scholars. However, these studies are often limited by period or by conjugation, conjunction and meaning, so it was considered insufficient to grasp the overall change. In addition, the appearance of *maji*'s conjugation and meaning is not unified for each of the side readings in

classic grammar education.

In this paper, we observed the changing patterns of *maji* by examining the conjugation, conjunction and meaning of each era by dividing into four ages: ancient, medieval, middle and early modern ages on what circumstances changed *maji*, which has continued such longevity and how the change leads to *mai* in the modern ages. Through this, the flow of *maji* in the whole era was grasped and further, how to explain *maji* in classic grammar education was proposed.

First, in the ancient ages, only *masiji* was used alone and the syllables were abbreviated and changed to *maji* of the middle ages.

In terms of conjugation, in the ancient ages, only two conjugated types appear; conjunctive form and conclusive form, in the medieval ages, *maji* was used most stably and it has all types of applications. In the Middle Ages, it became difficult to maintain the original form due to the ‘unification of the attributive–conclusive forms’ and it was divided into three forms: *maji*, *majii* and *mai* and showed a pattern of concentration on the conclusive form and attributive form. In the modern ages, *mai* is mainly used in spoken language, *maji* is mainly used in written language and *majii* is rarely used. In addition, it can be seen that the conclusive form and attributive form did not appear, so that it has entered a phase of decline.

In terms of conjunction, the *masiji* of the ancient ages connects to the conclusive form of the verb and attributive form of the r-[row] irregular verb. The medieval ages *maji* connects to the conclusive form of the verb and r-[row] irregular verb and the attributive form of adjectives

and adjectival verbs. In the Middle Ages, the connection was also influenced by the 'unification of the attributive-conclusive forms' and the appearance of connecting to the imperfect form of the upper monograde verb and the lower monograde verb appeared. In modern ages, the confusion of the connection surface is intensifying and there are cases of connecting to the unconventional type besides the upper monograde verb and the lower monograde.

In terms of meaning, *masiji* in the ancient ages had only negative presumption, but *maji* in the medieval ages was extended to five meanings: negative conjecture, negative will, negative natural (prohibited), impossible and inappropriate. However, in the Middle Ages, it has been reduced to three meanings: negative conjecture, negative will and negative natural (prohibited). In the modern ages, only three meanings were used: negative conjecture, negative will and prohibited due to the development of various auxiliary verb.

Next, in terms of classic grammar education, we came to the conclusion that it is correct to explain that *maji* has five conjugated forms, imperfect form 'majiku·majikara', conjunctive form 'majiku·majikari', conclusive form 'maji', attributive form 'majiki·majikaru', classical imperfective form 'majikere' and connects to the conclusive form of the irregular verb, attributive form of r-[row] irregular verb and has meanings; negative conjecture, negative will, negative natural (prohibited), impossible and inappropriate.